『高慢と偏見』における男と女

——ヒロインの成長と父性主義の原理——*

英米文学教室　門　田　　守

ジェイン・オースティン(Jane Austen)の『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice,* 1813)に対する態度には,二律背反的なところが見られるようだ。1813年1月29日付の姉カッサンドラ(Cassandra Austen)に宛てた手紙の中で，オースティンはその女主人公エリザベス・ベネット(Elizabeth Bennet)に関してこんなことを書いている。

> I must confess that I think her [Elizabeth] as delightful a creature as ever appeared in print, and how I shall be able to tolerate those who do not like her at least I do not know. (132)[1]

オースティンはエリザベスのキャラクターについては大変満足がいっているようである。しかしながら，その作品に関しては彼女はちょっと違った態度を見せる。最初の手紙を書いた直後，同じくカッサンドラに宛てた1813年2月4日付の手紙において，彼女はその作風についてはこう述懐している。

> The work [*Pride and Prejudice*] is rather too light, and bright, and sparkling; it wants shade; it wants to be stretched out here and there with a long chapter of sense, if it could be had; if not, of solemn specious nonsense, about something unconnected with the story;... [emphasis mine] (134)

オースティンは『高慢と偏見』には陰影が欠けていると言う。明るく快活で感受性豊かなエリザベスの行動により，作品としての『高慢と偏見』は充実したものとなっているであろう。しかしオースティンはその世界は明る過ぎ，何か言い足りなくて，付け足すべきものがあると言う。『高慢と偏見』の内容は中・上流階級に属する片田舎の数組の男女が結婚に至る交流の物語である。このことから推して，オースティンはこの小説において，18世紀後半の男女関係の理想的姿を描きたかったのではないだろうか。しかし，それはあくまでも理想でしかなかった。すなわちヒロインのエリザベスとフィツウィリアム・ダーシー(Fitzwilliam Darcy)の結婚はあり得ない，ご都合主義的なものでしかない，と批判することは可能だろう。ダーシーは豊かなダービーシャー(Derbyshire)のペンバリー(Pemberley)に大荘園をもち，年に1万ポンドの収入はあると言われている。それに較べて，エリザベスはハートフォードシャー(Hertfordshire)の小村ロンボーン(Longbourn)に住み,父親のベネット氏は5人の娘を養育する必要がある上に,年に2千ポンドくらいの上がりの土地しかもたない。

---

* "Men and Women in *Pride and Prejudice*: The Heroine's Growth and the Principles of Paternalism," The Department of English and American Literature, Tottori University, Mamoru Kadota

エリザベスの母方の祖父はメリトン(Meryton)で弁護士をしており，同じく母方の叔父はロンドンで商人をしている。社会的身分の点からも，彼らの結婚は不合理であろう。オースティンの言う「陰影の欠乏」とは当時の中・上流階級の抱えた社会・経済的問題や，とりわけその階層の女性たちが蒙っていた二重規範(double standard)[2]という軛を無視して，ヒロインをシンデレラ的結婚に導いてしまったことへの後ろめたさを含んでいたのであろう。

ところが，そうしたオースティンの女性問題に関する後進性を見直す動きが起こってきた。当時の女性が行える仕事はガヴァネスか専業主婦でしかなかった。結婚してからも彼らは法的人格を認められず，経済的活動や夫婦間の財産権の行使もできなかった。彼らは夫の財産の一部でしかなかったのである[3]。いかに保守的なオースティンであっても，こうした事情に目をつむったとは考えられ難い。最近のフェミニスト・クリティシズムの動きに目を向ければ，それは一目了然であろう。たとえばギルバート(Sandra M. Gilbert)とグーバー(Susan Gubar)はオースティンが女性の圧迫された経済的，社会的，そして政治的な状態について言及をしないのは，かえって女性が沈黙を続けなくてはならない父権的な支配構造への暗黙のプロテストとなっていると言う[4]。プーヴィー(Mary Poovey)はベネット氏を攻撃し，彼は娘たちの希望ある将来のために何も行動せず，社会的には無責任で，道徳的には空虚な人間であると主張する[5]。エヴァンズ(Mary Evans)は逆にベネット夫人を擁護し，彼女はやがて結婚する娘たちの将来や身の安定のために，親たるものの責任を真摯に引き受けた女性と述べる[6]。ジョンソン(Claudia L. Johnson)はオースティンの小説における結婚の価値を重視し，彼女のヒロインたちにとって結婚とは精一杯の女性の道徳的愛情表現であったと言う[7]。私はこうしたフェミニズムの視点が作品の多様な読みを提供し，豊かな成果を挙げてきたと思う。しかしながら，彼らの論点の全てが受け容れられるわけではなく，それらには重要な批評上の盲目点が見出されることがある。たとえばギルバートとグーバーの主張はオースティンの女主人公たちが常に虐げられて不自由な状態にあることを託つばかりであり，彼らがそういう状態から成長していくことについては盲目であるようだ。プーヴィーはオースティンの女主人公たちの父親が概ね無力あるいは不在である原理については見抜いていないようである。私はヒロインたちの父親に構造的に力が少ないことには理由があって，それは彼女たちが父親に理想の若い世代の男性像をかぶせ，そこから新たな家庭の建設に向かうためであると考える。父親が前面に出てこなくても，その影響力は決して少なくはない。エヴァンズがベネット夫人を擁護するのはよくわかるが，それではオースティンは何故この母親を長女のジェイン(Jane)や末娘のリディア(Lydia)を嫁がせる際に，あれほど愚鈍に書かねばならなかったのだろうか。エヴァンズはオースティンが明らかにベネット夫人を悪く書き，娘の結婚談義において父親と対立させていったことを説明していない。ジョンソンの主張はまさしくそのとおりであるが，結婚に際するヒロインたちの成長と情愛，すなわち愛することを学ぶという内的なプロセスについては深く考えず，結婚という静的な状態が彼女たちに対してもつ意味合いにのみ重点を置いているようである。フェミニストたちの主張には補うべき点が多いのである。

オースティンの作品を読解する際に，フェミニストたちがその足掛かりとするのは家父長制あるいは父権制(patriarchy)への批判の態度であろう。ところがその批評的スタンスの最大の問題点は，オースティンのテキストには父権の否定的面はほとんど現れてこないことである。もちろん父権が圧制的側面を見せることはあるにはある。たとえば『ノーサンガー僧院』(*Northanger Abbey,* 1818)ではヒロインのキャサリン・モーランド(Catherine Morland)は，実家が貧困であるという誤報が恋人ヘンリー・ティルニー(Henry Tilney)の父親ティルニー将軍(General Tilney)に伝えられた時，威

圧的な将軍によって即座にノーサンガー僧院から叩き出されてしまう。以前にモーランド家には莫大な資産があるという噂が将軍の耳に入っていたから，なおさらキャサリンは手酷い扱いを受けてしまうのだ。『マンスフィールド・パーク』(*Mansfield Park,* 1814)ではヒロインの貰い子のファニー・プライス(Fanny Price) は，引き取られた家庭の主人サー・トーマス・バートラム(Sir Thomas Bertram)が西インド諸島へ商用で留守中に，バートラム家の秩序の乱れを経験する。これは父権の秩序がそのバートラム家を覆っていたことを表わすものであろう。ところが，こうした事実はオースティンが父権を否定的に捉えていたことの直接的な証左とはならない。何故なら『ノーサンガー僧院』ではキャサリンが追放された後にヘンリーは彼女の後を追いかけ，彼女に求婚して受け容れられ，キャサリンの実家も普通の資産があることが判明し，二人の結婚は晴れて将軍に許されるのだから。また『マンスフィールド・パーク』においてもファニーはサー・トーマスの留守中に一人，主人の代わりのように敢然と倫理の乱れに立ち向かい，あたかも父権を守るかのように振舞うのだから。そうしたファニーが結局恋人エドマンド(Edmund)の心を得て，バートラムの「家」[8]の中心に位置するようになるのである。こうして見れば，父権の濫用による秩序の一時的攪乱は最終的には秩序をより堅固なものとし，それを維持していく働きをしていると言わねばなるまい。

オースティンが父権を否定していないのならば，彼女の作品の男と女の関係を論じるのには，別の概念を導入しなければならないであろう。そこで私はロバーツ(David Roberts)の唱える父性主義(paternity/paternalism)という概念を議論の準拠枠として採用したい。ロバーツによれば，父性主義的態度がヴィクトリア朝初期小説では支配的であったと言う[9]。さらに彼に従えば，父性主義は三つの対抗勢力である"the economists' vision of a laissez faire society, the evangelicals' hope of an expanding philanthropy, and the utilitarians' belief in a reforming government" (85) のどれよりも優勢であった。要するにパターニティとは社会をあたかも家族のようにみなし，法や組織の変更に拠ってではなく，集団の成員による相互の絆や集団の長への自発的な敬意によって共同体をまとめあげる態度である。それは"the smaller sphere of the landed estate, the parish, and the mill and the known authority of the squire, parson, and millowner" (85) をその理想的な共同体とする，保守的な社会観であった。

本稿では，私はこの父性主義に依拠して『高慢と偏見』をいくつかの場面に分けて読み解きたい。そうすることによって，オースティンの父権制を批判するような姿勢の下に実は父性主義への愛着が息づいていることを示したい。そうした批評姿勢の方がオースティンの女主人公の内的成長の過程をより綿密に説明し，この作家の人間理解の本質に接近できるであろうから。

I

『高慢と偏見』は"It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife." (1)[10]という明澄な定義から始まる。この小説の展開の主眼点が全てコンパクトに含み込まれた書き出しである。すなわち物語のプロットは結婚への画策から始まり，その成就で終わるのである。かくして娘の売り込みをめぐってベネット夫妻の対立が始まる。ネザフィールド(Netherfield)に新しく家を借りたビングリー(Bingley)の兄妹との交際がその対立の発端である。このネザフィールドの「家」とロンボーンの「家」の交流のいくつかの場面から議論を始めよう。

ベネット夫妻による娘たちの結婚市場への売り込みは，オースティンの「母性」と「父性」に関

する基本姿勢を反映している。母親はあくまで愚かな人間として描かれ，父親はその消極性の裏に理性の働きを宿しているように提示されている。ベネット夫人の一生の仕事とは娘たちを嫁がせることだけで，その楽しみとは他家を訪問したり，ゴシップの伝播に耽けることであった。彼女の願いは金銭や社会的地位を含んだ娘たちの物質的な繁栄である。それが大いにベネット夫人自身にフィード・バックされる繁栄であることは，忘れられてならない。彼女の目標とはきわめて表層的であり，幸福のための条件整備に過ぎないのである。また，彼女の性格は『分別と多感』(*Sense and Sensibility,* 1811)におけるダッシュウッド夫人(Mrs Dashwood)のそれと似ている。『高慢と偏見』は1797年8月に脱稿しているが，そのすぐ後11月に『分別と多感』の執筆が開始されたこともこれに影響しているのであろう[11]。それは両夫人ともに感情に流されやすく，理性的な判断力に欠けるという点である。ダッシュウッド夫人は次女のメアリアン(Marianne)とプレイボーイのウィロビー(Willoughby)とのロマンテックな恋愛を夢中になって推奨した。それと同じように，ベネット夫人も10万ポンドとも言われる父親の遺産を相続したビングリーに，彼の人格を確かめることもなく娘の一人を躍起になって嫁がせようとしている。ベネット夫人の方が経済感覚に富んでいることを除いて，彼女たちはともに愚かな母親像を示している。

父親のベネット氏は，この妻とは対照的な性格や働きを示す。彼の小説の中での機能については，その地味な性格のために，批評の前面に現れてくることはめったにない。そこで父性としての彼の働きを検討してみたい。ベネット氏は感情に流されて，娘を結婚市場に売りに出そうとはしない。ところが，これは彼が娘の結婚に対して道徳的責任を回避していることを示しているわけではない。彼は誰に言われることなく，一人でビングリーに会いに行く。それは彼が娘の幸せを願っていることを示しているのであろうし，また自制を欠く妻が勝手にビングリー家と交際を始めようとして失態を犯すのを制しているようにも思われる。彼は妻や娘たちによってビングリーの容貌についてしつこく問われるが，それには一切答えない。彼は感情的に第一印象で人間把握をしようとはしない。相手に関する事実に基づく情報を積み上げることによって，初めてその相手の人格が把握されるのである。人間性の理解には必然的に時間がかかるものなのである。彼がビングリーの品定めに優柔不断の態度をとるのは，事実に基づいて時間をかけた相手の観察が未だ不足しているからなのである。ベネット夫人は近隣の住人であるロング夫人(Mrs Long)を介して，ビングリーに接近しようとする。だがロング夫人でさえ，よくビングリーを知らない。ここでベネット氏の言う"A fortnight's acquaintance is certainly very little. One cannot know what a man really is by the end of a fortnight." (5)という言葉が活きてくる。たった二週間ほどの付き合いの間柄ではロング夫人はビングリーについてよく知っているはずがなく，よって彼をベネット家の娘たちに引き合わせることはできないであろう。ここではベネット夫妻の間で人間を「知る」ことについての，認識論的懸隔が露呈している。夫人の方が社会的コンテキストで相手を紹介することができる程度に人間を「知る」と言っているのに対して，夫は相手の内実まで間違いなく把握するという意味で人間を「知る」と言っているのである。妻は楽天的な感情人であり，夫は理性的な人間性の観察者なのである。

『高慢と偏見』がもともと『第一印象』(*First Impressions*)というタイトルを与えられていたことは，この点で意味のあることである。バトラー(Marilyn Butler)は，オースティンは人間の本能や感情を過度に良きものとして受け容れるシャフツベリー(Earl of Shaftesbury)やスコットランドにおける彼の思想の継承者ハッチスン(Francis Hutcheson)らの楽天主義を排し，理性的な人間把握の立場を取ったと言う[12]。登場人物の挫折や有頂天といった感情の流れが『高慢と偏見』の面白味の源泉であることは確かである[13]。そうではあるが，オースティンが蒙昧な人間の感情過多と理性的な

人間の炯眼とを対比させ，後者を優位に書き進めたことは『ノーサンガー僧院』のキャサリンとヘンリー，『分別と多感』のメアリアンとブランドン大佐(Colonel Brandon)のカップルに見えるように明らかである。ベネット夫妻の対立もこの系列で理解されるべきであって，夫は正しくものを見る理性人なのである。

ベネット氏はエリザベスと理性主義という共通項をもつ。彼が一歩下がって家庭内の事情を見るのと同じく，エリザベスも家族からディタッチメントを保って，その結婚市場に参加しようとする愚行を眺めている[14]。ベネット氏はエリザベスを可愛がり，唯一娘たちの中で彼女を"I must throw in a good word for my little Lizzy... Lizzy has something more of quickness than her sisters." (3) と推奨している。帽子の手入れをしているエリザベスに，彼は"I hope Mr. Bingley will like it Lizzy." (4) と優しい声をかけてやる。この後，彼がビングリーに面会に行くことから推して，父親がビングリーと交際の引金を起こすのはエリザベスの紹介のためなのである。

かくしてメリトンでの舞踏会にネザフィールドの「家」に関連する人間たちが呼ばれることになる。ここの場面から物語の語りの視点はエリザベスに集中して展開していく[15]。エリザベスの目を通して登場人物たちの個性が色分けされていき，逆に彼女自身のものの見方も明瞭になる。彼女の視点の特徴は対象をアピアレンスとリアリティに分けて眺める態度である。パーティーに来たのはビングリーと彼の姉妹，姉娘の主人ハースト氏(Mr Hurst)，そしてダーシーであった。ダーシーはビングリーとの会話で，エリザベスの耳に聞こえる距離であるにも拘らず"She [Elizabeth] is tolerable; but not handsome enough to tempt *me*; and I am in no humour at present to give consequence to young ladies who are slighted by other men." (9) と無礼な台詞を言ってしまう。せっかくの舞踏会でもハースト夫人とミス・ビングリーとしか踊らず，娘を傷つけることを平気で言うダーシーにベネット夫人はすっかり腹を立ててしまうが，当のエリザベスはダーシーに馬鹿にされたことをかえって嬉しがっている。彼女は皆に面白そうに舞踏会での経験を話している。これは何故であろうか。その理由は，エリザベスは何事もありのままに見ようとする女性だからである。お淑やかで美人のジェインに較べて，活発なエリザベスはどうしても見劣りしてしまう。ダーシーはベネット家のどの娘とも踊らない，すなわち親密な関係を結ぶことを拒否しているのだから，エリザベスにのみ拒否反応を示しているわけではない。ダーシーのパーティーでの評価は出席者の誰にも"His character was decided. He was the proudest, most disagreeable man in the world, and every body hoped that he would never come there again" (8) という最低のものであったので，いっそう彼は公平な女性評価をしていることになる。このありのままの姿を見ようとする誠実さによって，エリザベスとダーシーは互いに引き合うようになるのである。

舞踏会の後のエリザベスとダーシーの反応は驚くほど似かよっている。エリザベスは，ジェインが誰に対しても愛想が良くて，人の欠点をなるだけ見ないようにすることを批判して，こう諭す。

> With your good sense, <u>to be so honestly blind to the follies and nonsense of others!</u> Affection of candour is common enough;—one meets it every where. But to be candid without ostentation or design—to take the good of every body's character and make it sill better, and say nothing of the bad—belongs to you alone. And so, you like this man's [Bingley's] sisters too, do you? [emphasis mine] (11-12)

人間はあくまで他者の愚行や性格の悪さに盲目になってはならないのである。ジェインにもビングリー姉妹の俗悪さや見え透いた社交界の虚礼が見えているのかもしれない。しかし彼女はそれに目をつぶろうとする。こうしたジェインの態度は結婚市場に出ていく彼女の優等生ぶりを裏書きする

ものである。ジェインはベネット夫人の自慢の娘であり，娘たちの中で最も結婚に近い存在であった。エヴァンズは結婚とは18—19世紀においては女性にとって経済行為であり，端的に言って"marriage is a social and material contract" (46)[16]なのだと主張する。ショーウォーター(Elaine Showalter)はヴィクトリア朝においては規範を外れる女性は狂女としてみなされ，女性性(femininity)と狂気(insanity)は連動して捉えられる概念であったと言う[17]。オースティンは時代的には少し前だが，ジェインのキャラクタリゼーションに社会規範の圧力を加味しているのかもしれない。いずれにしても結婚市場の倫理に無頓着で独立した見方に固執するエリザベスは，女性に期待される社会的ノームから逸脱している。彼女は一歩間違えば，へそまがりの偏屈女と見られてしまう危険を冒しているのである。オースティンが『高慢と偏見』には「陰影」が足りないと言うのは，こうした圧迫された女性の事情を軽く見てしまったことを反映しているのであろう。しかしながらエリザベスは自分の視点を守って，ビングリー姉妹の慇懃ぶりを受け容れることを拒否するのである。

ダーシーもエリザベスと同じく，ありのままの人間の姿を見ようとする。彼のベネット家の娘たちへの態度は，ビングリーのそれとほぼ正反対である。

> Darcy, on the contrary, had seen a collection of people in whom there was little beauty and no fashion, for none of whom he had felt the smallest interest, and from none received either attention or pleasure. Miss Bennet he acknowledged to be pretty, but she smiled too much. (13)

18世紀イギリスの慣習では長女（あるいは次女を含めることもあるが）のみが社交界に送り出され，その下の娘たちは概ね家庭にとどめられていたという[18]。そうしてみれば，ベネット家の娘たちは社会的因習を無視してまで結婚市場に参加する醜さを晒しているのである。あるいは，その「家」の教育の無さを露呈していると言ってもよかろう[19]。ダーシーがベネット家の俗悪ぶりに嫌気を覚えるのは自然な反応であろう。ビングリーは対照的にベネット家のどの娘も感じが良く，特にジェインに対しては"he ［Bingley］ could not conceive an angel more beautiful" (13)と言うまで，惚れ込んでしまう。アウエルバッハ(Nina Auerbach)は理想的な妻をエンジェルとして形容することはヴィクトリア朝の慣習であったが，それは同時に彼女を家庭という避難所あるいは監獄へと閉じ込めることであったと言う[20]。ビングリーとジェインの関係は，身分的関係はさておき両者の心情的関係としては，18—19世紀イギリスの中・上流階級の男女の典型的な結びつき方を示しているのである。そして，ダーシーとエリザベスのカップルは社会的慣習からの逸脱と言わねばならない。

ダーシーとエリザベスの関係は，人間性に対する理知的観察態度に基づく共通の心理的基盤を獲得することによって進展していく。両者の関係はマンセルの言う"some subterranean changes" (97)[21]を経て，お互いに相手の真の価値を発見し，人格的成長を遂げるという論理的構成を成す。彼らの心理的接近の過程は微妙で見出しにくいが，精読すればそれがアイロニーの言語によって実現されているのがわかる。さらに大事なことは恋愛の主導権はダーシーの側にあって，エリザベスは受け身の状態にあることである。ダーシーはエリザベスに歩み寄って，父性的な見地から彼女を最適のパートナーとして認め，またそうなるように導いていく。社会的身分の点でもダーシーがエリザベスを恋人として認めるのは，大変な地位の下落であった。ダーシーは父親が娘に対してするように，エリザベスを救い上げてやるのである。

エリザベスの理知主義はこのように現れる。それはエリザベスが彼女の友人シャーロット・ルーカス(Charlotte Lucas)と行なう，ビングリーとジェインの関係をめぐっての会話の中である。エリザベスはビングリーが姉を好きなことは知っているが，彼が率直に愛情を姉に打ち明けないのは不

可解だと思う。エリザベスの恋愛観の理知的態度が明瞭になる。エリザベスは姉が内気な性格で，内面をめったにあらわにしないことは認める。だがもし相手の男が姉を好きならば，彼女の僅かな心の動きの中に彼女の愛情を認めるのが当然であるともエリザベスは考えている。エリザベス自身にさえ姉の気持ちがわかるのだから，ビングリーがジェインの心の中を察してやらないのは，実はビングリーの愛情が不確かなものなのではないだろうか，と彼女は気付くのである。またシャーロットが恋人が相手の心を研究するのは無益で，結婚に際しては相手の欠点を知らない方が良いのだと主張する時，エリザベスは真っ向からそれを否定する。彼女は物事をありのままに見て，歪んだ人間観を憎むのである。彼女は一つ一つ相手に関する内面的かつ外面的なデータを積み重ねて，やっと相手を理解できるという，経験主義的な恋愛観をもっているのである。

エリザベスは感受性に富んではいたが，ダーシーが密かに自分に関心を向けていることには全く盲目であった。ダーシーは恋愛におけるアッパー・ハンドをもち，エリザベスを評価していく。その視点は分析的で，見せかけと誠実を峻別していくものである。エリザベスには確かに欠点がある。彼女は身のこなしが軽くても，とても社交界向きとは言えず，粗野な田舎娘に過ぎなかった。しかし彼はその欠点を埋め合わせるような魅力を，彼女の中に見出していく。サー・ウィリアム・ルーカス(Sir William Lucas)邸でのパーティーでエリザベスとメアリーはピアノを弾く。メアリーは才能も趣味もなく，虚栄心が丸見えの演奏しかできなかった。それに較べてエリザベスはメアリーの半分の腕前しかなかったが，自然でいかにも気どりのない演奏を行なった。メアリーは気どりのために自分の弾ける技術力を台無しにし，エリザベスは内面のピュアな誠実さをそのまま面に出しただけである。見せかけと誠実の対立は明瞭だろう。

ダンスの場面でのダーシーとエリザベスの対応は興味深い。サー・ウィリアムがダンスの楽しさを社交文句として讃える。ダーシーはそれに同意するが，その理由は世界中のどの下賤な集団でもダンスは流行っているのだからと述べる。また彼は，そういえば野蛮人だって踊れるだろうからと辛辣に言を継ぐ。ダーシーは見せかけの価値に反発しているのだ。その後でダーシーはエリザベスにダンスを申し込むが，あっさりと断わられてしまう。依然メリトンの舞踏会で彼がエリザベスの容貌を貶したことや直前の彼のダンス嫌いの態度から，エリザベスがこの申し出を断わるのは当然であると思われる。その断わり方で，エリザベスは"Mr. Darcy is all politeness." (22) と微笑みながら言う。決してダーシーはポライトなどではない。エリザベスはアイロニーの言語で自らの不満の意を伝えるとともに，ダーシーに彼の行動の不適切さのシグナルを送っているのである。エリザベスはちょっとはにかんでダーシーの差し出した手を避け，茶目っ気を込めてそっぽを向いただけである。この拒絶は何故かダーシーに彼女の印象を貶めるものではなかった。ダーシー自身彼女に振られたことで，逆にある満足感を抱いたのである。この辺のアイロニカルな事情をオースティンはこのように書いている。

> Elizabeth looked archly, and turned away. Her resistance had not injured her with the gentleman [Darcy], and he was thinking of her with some complacency,... [emphasis mine] (22)

ダーシーほどの地位も財産もある人間なら，簡単に人前で田舎屋敷の娘に振られて身分的に不快感を蒙らないはずがないと考えるのが普通であろう。この場合ダーシーがむしろ爽やかな感情をエリザベスに抱いたのは，身分関係を越えた愛情を彼がエリザベスに対して育み始めたことを表わしているのである。それはパーティーの空虚さや身分上の障碍といった表層的問題を無視し，真の人間関係を渇望する態度が両者の間にあったことを意味している。ミス・ビングリーがパーティーは退

屈でしょうとダーシーに切り出すと，彼は"Your conjecture is totally wrong, I assure you. My mind was more agreeably engaged." (23) と答える。通常舞踏会を愛好しているミス・ビングリーとダンス嫌いのダーシーのアイロニカルな意見の交差が見られる。こうして，ダーシーとエリザベスは共通の心理的基盤をもつようになるのである。ただし，こうしたことの一切にエリザベスは気付いていない。エリザベスがダーシーの父性的愛情に相応しい相手として認知されていくのは，次節でも詳しく見られるだろう。

II

ここまでの『高慢と偏見』のプロットを牽引していくのは表層的にはビングリーとジェインの関係である。ただしその関係が危殆に瀕していることを，われわれは既にエリザベスの澄んだ観察眼によって暗示されているのであるが。ジェインはミス・ビングリーの手紙でネザフィールド屋敷へ招待され，雲行きの怪しい天気の中，馬に乗って出かけて行く。ジェインの出発をめぐり，また母性と父性は対立する。ベネット夫人は雨になりそうなのをかえって喜び，そのままジェインがネザフィールド屋敷に宿泊し，ビングリーとの関係を深めることを望んでいる。それに対しベネット氏はジェインの意向のとおり馬車を出してやりたかったのだが，妻に言いくるめられてしまい，そのままジェインを馬に乗せて送り出す。予想されたように土砂降りの雨になると，ベネット夫人は大喜びである。彼女はジェインの体のことなど心配せずに，"This was a lucky idea of mine, indeed!" (26) と自画自賛する。母親の愚鈍さと父親の力の無さが浮かび上がってくる。ジェインは案の定風邪をこじらせ，ネザフィールド屋敷から帰れなくなってしまう。

ジェインが病気になっても，父親と母親の対立は続く。父親はジェインの病気の手紙を受け取り，こう言う。

> Well, my dear,...if your daughter [Jane] should have a dangerous fit of illness, if she should die, it would be a comfort to know that it was all in pursuit of Mr. Bingley, and under your orders. (27)

それに対する母親の受け答えは，何ともそっけない。

> Oh! I am not at all afraid of her dying. People do not die of little trifling colds. She will be taken good care of. As long as she stays there, it is all very well. I would go and see her, if I could have the carriage. (27)

大事なことは，こうした性格の色分けには父親が情愛に基づく感情主義，母親が合理に基づく功利主義の人格を与えられていることである。この二つの性格は畢竟，概念史派批評のバイブル的存在である*Dictionary of the History of Ideas* (1968-74) がヴィクトリア朝精神の光と影のようにして挙げた，福音主義(Evangelicalism)と功利主義思想の対立を反映しているのであろう。この大著はこう言う。少し長くなるが，引用しよう。

> The major external pressures were an expanding population, spreading industrialization, greater concentration of people in large urban areas, and an increase in wealth which was diffused among growing numbers of people. The conscious Victorian response to these external changes and values was in large measure determined by attitudes and values inherited from the past, the most important of which were Evangelicalism in religion and utilitarianism in philosophy. The coalescence of these external pressures and

internal attitudes created a social structure and cultural pattern, centering in the middle class and characterized by a distinctive mode of thinking and feeling, that gave stability to English society for approximately fifty years. [emphasis mine] (4.217)[22]

そして福音主義は情愛，とりわけ愛他主義によって内面的に家族の中に浸透していったのに対し，功利主義は主に公共の問題の合理的解決の点から外面的に家族の中に入っていったのである。ヴィクトリア朝人にとって"while their Evangelical religion told Victorians to love their neighbor, their utilitarian economic principles told them that the deepest instinct of man was to defraud his neighbor" (4.221)なのであった。

こうした原理で『高慢と偏見』のベネット夫妻を眺めると，どうなるであろうか。決して表立ってはいないが，ベネット氏は情愛豊かに娘を愛している。彼のお気に入りのエリザベスは泥道を3マイルほども歩いて病気の姉の看病に行くのだから，これは愛他主義の典型と言わねばならない。ベネット夫人は結婚市場への参入を目指す経済原理至上主義の塊である。その道具とされるジェインは母親の欲得のための犠牲となるのである。母性は実利主義と結びつき，子供の精神的成長を歪める傾向があるのである。

小説の舞台はネザフィールド屋敷に移り，エリザベスとダーシーはさらに共通の心理的基盤を堅固なものとしていく。泥もつれになって到着したエリザベスをダーシーは最初はそこまでしなくてもと考え，ただ運動で上気した顔色の良さの美しさに見とれるだけである。だが部屋の中の会話で，ダーシーはますますエリザベスの魅力に気が付くようになる。ただし，エリザベス当人はその動きには無意識的であるようだ。

会話は理想の女性論に及ぶ。ダーシーは女性一般に共通の才能は認められず，真の教養を身に付けた女性は6人とは知らないと言う。ミス・ビングリーはその真の教養を身に付けた女性の条件をさらに上乗せし，理想の女性は音楽も歌も絵も舞踊も完全に習得し，あまつさえ近代語に通じていなければならないと言う。ダーシーもこの意見に賛同しているようだ。ところがこれに対し，エリザベスはにわかに"*I* never saw such a woman. *I* never saw such capacity, and taste, and application, and elegance, as you [Darcy] described, united." (34)と反駁する。オースティンの小説では登場人物の会話は非常に繊細な感情の交錯を表わすが，ここでもその最たる例が見られる。ダーシーはもともと完全な女性の存在をとても少なく見積っている。ミス・ビングリーがそうした女性の条件をさらに厳しくするのは，女性一般の才能の弁護あるいは女性の能力への見栄を張るために言っているのである。とんでもない女性の能力のインフレーションに，ダーシーがさらにもう一つ"to all this she [a woman] must yet add something more substantial, in the improvement of her mind by extensive reading" (34)という条件を付け足すのは，ミス・ビングリーの非現実的な見栄っ張りを揶揄する効果を帯びる。ということは，ダーシーは世の中には理想的な教養を備えた女性などはほとんどいないのだと考えていると言える。常識的に考えて，そんな高い条件をクリアできる女性は数少ないであろう。そこでダーシーはエリザベスに自分との意見の一致を見出すのだ。ミス・ビングリーやハースト夫人といった，とりつくろった虚栄に満ちた女性たちの中で，ダーシーはエリザベスに唯一の心理的共通基盤を発見するのである。さらにここではエリザベスは自らの理性主義が命ずるままに見せかけの女性論を排し，そんな完璧な女性が存在しないことを訴えているのである。そこには，彼女のダーシーへの恋慕は見出せない。ところが思わず"*I*"に強勢を置いて発言するエリザベスは，意識せずにダーシーにラブ・コールを送ってしまったのである。ハイ・ソサイアティーの中で一人取り残されているエリザベスは，理想的な教養を欠く女性の一人

である。ミス・ビングリーは資産家のダーシーに取り入ろうとしている。このことを考え併せ，さらにもし理想の条件を満たす女性がほとんどいなければ，エリザベスにしても同じこと，ダーシーへの求愛競争に参加する資格があることになるのである。さらにもしダーシーがエリザベスと同意見であるならば，ミス・ビングリーの顔は丸潰れで，彼女は虚栄心に満ちた女性のレッテルをあまんじて受けなければならないことになるのである。エリザベスは知らず知らずのうちにミス・ビングリーよりも，ダーシーに相応しい女性となるのだ。

ダーシーはほのかにエリザベスに愛着を寄せていることを示している。というのは，この場面は病状の思わしくないジェインの看護に気の滅入ったエリザベスが，ビングリーの蔵書の中から選んだ本を読もうとしている設定だからである。エリザベスは読書しているところをミス・ビングリーたちのお喋りに邪魔され，いやいやその会話に付き合わされるのである。ミス・ビングリーたちは読書よりも，トランプの好きな連中である。エリザベスは本を持つか，おそらくはその傍らに置いているのであろう。そういう状態で女性は読書による，ちゃんとした知識を身に付けなければならないと言われたらどうであろうか。彼女はダーシーによって推奨されているのであろう。

また，その場面の前でミス・ビングリーはダーシーの蔵書を"What a delightful library you have at Pemberley, Mr. Darcy!" (32)と誉め讃えている。ダーシーは家庭における蔵書の精神的価値を重視しているものと思われる。彼は図書を無視する傾向を"I cannot comprehend the neglect of a family library in such days as these." (32)と批判しているからである。ところが，この"neglect"の意味合いはミス・ビングリーによって完全に誤解されてしまう。彼女はすぐさま兄のチャールズ(Charles)に，こういう屋敷を建てるように勧めるからである。

> Neglect! I am sure you neglect nothing that can add to the beauties of the noble place. Charles, when you build your house, I wish it may be half as delightful as Pemberley. (32)

"delightful"という言葉が再び使われていることに，注目されたい。蔵書とは彼女にとって地所の美しさを増すための飾りでしかないのである。"neglect"とはそうした表層的な美しさを加えることを「無視」するという意味にずらされているのである。そうした図書も質のよくない通俗小説であったのかもしれない。いずれにしても，ダーシーはミス・ビングリーの通俗性に気付いているのであろう。

ダーシーがエリザベスを恋人として認知していることは，彼女の退室後の彼の対応にも認められる。ミス・ビングリーとハースト夫人は，エリザベスの女性観には一様に反対している。エリザベスがいなくなると，ミス・ビングリーはこう彼女を貶めようとする。

> Eliza Bennet,...is one of those young ladies who seek to recommend themselves to the other sex, by undervaluing their own; and with many men, I dare say, it succeeds. But, in my opinion, it is a paltry device, a very mean art. (34)

これにすぐに応じて，ダーシーはこう答える。

> Undoubtedly,...there is meanness in *all* the arts which ladies sometimes condescend to employ for captivation. Whatever bears affinity to cunning is despicable. (34)

ここには，アイロニーの言語を用いてエリザベスを擁護しようとするダーシーの態度がある。簡単に言って，こういう完全な女性がいるのだと主張している女性たちこそが最も理想からほど遠い位置にあるということである。ダーシーが*"all"*に強勢を置いて受け答えているのは，ミス・ビングリーのダーシー攻略の手練手管をも"meanness"の中に加えようとする意思の現れとも受け取られる。ダーシーを口説く気持ちはエリザベスにはなく，ミス・ビングリーの方にこそあることを忘れては

ならない。ダーシーは自分の使うアイロニーの意味を理解していると思われる。その後で"cunning"であることは最も"despicable"なことなのです，と彼は述べるからである。実は"cunning"なのは当の，目の前にいる二人の女性なのだから，ダーシーはエリザベスの弁護をアイロニカルに行なっているはずなのである。

ベネット夫人がやっとネザフィールドに来てからも，ダーシーはますますエリザベスに愛着を深めていく。そのきっかけはベネット夫人の愚行である。ベネット夫人は相変わらず悪し様に描かれている。彼女のここでの役割はジェインを売り込みに来る，ただのセールス・レイディのそれである。彼女に拠ればジェインは"the greatest patience in the world" (36)をもち，"the sweetest temper I ever met with" (36)にも恵まれた女性で，他の娘たちよりも群を抜いて優れているとのことである。また彼女はジェインに言い寄った男を挙げて，こう言う。

> When she [Jane] was only fifteen, there was a gentleman at my brother Gardiner's in town, so much in love with her, that my sister-in-law was sure he would make her an offer before we came away. (38)

つまり，早くしないとジェインは売れてしまうと言いたいのであろう。女性は結婚しなければ暮らしていけなかったというフェミニストたちの説を考慮に入れても，ベネット夫人は悪く描かれ過ぎていると思う。もしもオースティンの意図が女性の社会的，経済的立場のプロテストであったのならば，彼女はもっとストレートにそう書けばよかったはずであろう。オースティンの意図はもっと別のところにあり，彼女はベネット夫人を通じて誤った女性観を暴露していたのである。

悪しき母親はジェインを讃えた，美しい詩が残っていると言う。その詩を残して，相手の男のジェインへの思いは立消えになってしまったのだ。母親はその恋が真摯なものであったと言いたいのであろうが，ダーシーはそれを疑っている。彼は詩は恋の滋養になるべきものだと考えているのだ。エリザベスはそのダーシーの説を受けて，ほとんど彼の言いたいことを代弁してやる。

> Of a fine, stout, healthy love it may. Every thing nourishes what is strong already. But if it be only a slight, thin sort of inclination, I am convinced that one good sonnet will starve it entirely away. (39)

これを聞いたダーシーは"Darcy only smiled." (39)という反応しか示さないが，彼がエリザベスの意見に同意していることは明らかである。ダーシーという人間が少なくとも公共の場では大袈裟な言動をしないことを考慮すれば，この静かな微笑みはエリザベスが彼の眼にかなった女性であることを表わしているのであろう。ひ弱な恋心ならば詩を一つ書くくらいでそのエネルギーを消費しきってしまうものだからだ。エリザベスは理性的な思考法と，一度人を愛したらその人にとことん付き合うべきという強い情念をもった女性であったのだ。ダーシーがこのような女性を受け容れたのは当然であろう。

メリトンとサー・ウィリアム・ルーカス邸での舞踏会，さらにネザフィールドでの滞在を通して，エリザベスは次第にダーシーと心理的基盤を共有するようになった。しかし，エリザベスはこのことに何ら気付いてはいない。ダーシーが素直に自分の欠点を

> I have faults enough, but they are not, I hope, of understanding. My temper I dare not vouch for.—It is I believe too little yielding—certainly too little for the convenience of the world. I cannot forget the follies and vices of others so soon as I ought, nor their offences against myself. (50)

と告白しても，それに他のどの女性よりも心理的に親近性のある対応をするのはエリザベスである。

彼女の即応はこうだ。

> *That* is a failing indeed!...Implacable resentment *is* a shade in a character. But you have chosen your fault well.—I really laugh at it. You are safe from me. (51)

エリザベスは知らないうちに結婚市場に出てしまい，ダーシーに受け容れられてしまったのである。その無意識の行動はジェインに先んじるというアイロニカルな結果を生んでしまった。エリザベスの行動を追うプロットとは裏腹に，心理的にはダーシーが全ての出来事を知り，上から見おろす形になっているのである。ベネット夫妻と違い，この恋人たちは虚偽を憎む理性主義に基づく，同一の心理的地平に立っている。ダーシーの父性的な眼差しは，情愛によって結ばれた新しい夫婦関係へとエリザベスを導くのである。

III

エリザベスは父性主義によって救われるべき二つの苦難に陥る，と言えよう。その一つはコリンズ氏(Mr Collins)による限定相続(entail)のためにベネット家が経済的危機に瀕し，彼女がこの教区牧師に求婚されることである。もう一つはメリトンで会ったウィカム(Wickham)というダーシー家の元執事の息子に騙され，あまつさえ彼に恋してしまうことである。彼女は最初の危機から父親によって，次の危機からダーシーによって救われる。母親は常にあてにならず，むしろ彼女を結婚市場の犠牲者にしようとするのである。ここでは父親がエリザベスを救う場合を考えてみよう。

コリンズ氏は功利主義を地でいくような人物である。彼はベネット氏の従兄弟であるが，遠い親戚であってベネット家とはほとんど付き合いがない。たまたま後見人のキャサリン・ド・バーグ夫人(Lady Catherine de Bourgh)という，ダーシーの叔母の恩顧でロンボーンの教区牧師に抜擢され，彼は限定相続人としてベネット家に乗り込んで来る。限定相続とはその「家」に男の相続人がいない場合，一番血の繋がりの近い親類の男子が財産を継ぐことになる民事制度である。彼はベネット家の人間にも資産がいきわたるように，５人娘のうち誰かを嫁に貰う魂胆なのである。たまたまジェインがビングリーと婚約になりそうだという事情があったので，コリンズ氏は次にエリザベスに標的を絞ってくる。そこには何の愛情の流れもなく，損得勘定と肉体的セクシュアリティの原理しかないのだ。

コリンズのエリザベスへの接近は実に抜け目のないプランに裏打ちされている。まずはネザフィールドの舞踏会で最初の２度一緒に踊るように約束させ，次は母親に根回しして婚約を承諾させるというものである。正式に求婚したコリンズは"one thousand pounds in the 4 per cents. which will not be yours till after your mother's decease, is all that you may ever be entitled to" (96) と，自分と結婚しなければ年に４分の公債しか貰えないのだとしつこく迫る。彼は自分たちの結婚の利点として"It does not appear to me that my hand is unworthy your acceptance, or that the establishment I can offer would be any other than highly desirable." (97) と身分的かつ経済的な外的条件しか挙げない。そしてまさしく外的条件としては，この結婚は何の問題もない。ところが，それにエリザベスは抗っていく[23]。

危機に陥ったエリザベスが真っ先に頼りとするのは父親である[24]。彼女は何の躊躇いもなく"to apply to her father, whose negative might be uttered in such a manner as must be decisive, and whose behaviour at least could not be mistaken for the affection and coquetry of an elegant female" (98) する決心をする。父親の権威は決して否定されていない。また詳しく論じられることは少ない

が，飄々としたベネット氏も自分の権威を放棄しているわけではなく，エリザベスの期待に相応しい行為をするのである。

エリザベスの結婚問題の本質はかくして母親と父親を巻き込んだ，母性と父性の対立の構図に収斂していく。父親の書斎の中，エリザベスの目の前で，母親と父親が対立する。ベネット夫人は夫に書斎から出て来て，エリザベスを説得するように，このように切り出す。

> Oh! Mr. Bennet, you are wanted immediately; we are all in an uproar. You must come and make Lizzy marry Mr. Collins, for she vows she will not have him, and if you do not make haste he will change his mind and not have *her*. (100)

この場合"have *her*"という語句にいかほど所有のイメージが詰まっているのか定かではないが，結婚が物質的利便が前提の契約関係に過ぎないことは間違いあるまい。ベネット氏はこう言われても，決して書斎からは出ない。いや，もし部屋から出たとすれば，おそらく彼の負けであったであろう。彼の書斎には父性主義という別の空気が流れているように思われる。ここだけはベネット家でも父親中心の秩序が保たれている空間なのだ。そして，エリザベスが父親の書斎に入れば落ち着いた気分になれ，本来の自己を開陳することも忘れてはならない。エリザベスがプロポーズを受諾するか否かについて，彼はきっぱりとこう言う。

> An unhappy alternative is before you, Elizabeth. From this day you must be a stranger to one of your parents.—Your mother will never see you again if you do *not* marry Mr. Collins, and I will never see you again if you *do*. (100)

エリザベスは父親が示した期待通りの，母親への厳しい受け答えに思わず微笑んでしまう。エリザベスの結婚騒ぎはこの後次第に治まってしまうのだから，父親は彼女にとってまさに救世主であったのだ。

ベネット氏は"I shall be glad to have the library to myself as soon as may be." (101)と言い，すぐさま書斎に籠ることを所望する。書斎に重きを置くという点で，ダーシーはベネット氏と共通点をもつ。ダーシーが立派な書斎をもつことは，ネザフィールドの家の会話で既に明らかになっている。またミス・ビングリーのような嫌な話相手から逃れるために読書を使う点(1.11)でも，彼はベネット氏に似ている。これはベネット氏が妻の狂気じみた娘の売り込みを敬遠することと符合している。両者ともに父性の代表であるし，エリザベスの教育はベネット氏からダーシーに引き継がれると考えるのが，自然であろう。

ベネット氏の書斎でもそうであるが，オースティンの小説では部屋が重要な働きをするようだ。それは小さな閉じられた世界ではあるが，ポジティヴな機能を果たす。この点でオースティンの部屋はアウエルバッハの言う，ロマン的閉じ込めの空間[25]とは異質な様相を呈する。部屋は立ち聞きや手紙の朗読が行なわれる空間である。ダーシーがエリザベスの品定めをするのも部屋だし，『説得』(*Persuasion,* 1818)においてウエントワース大佐(Colonel Wentworth)が元恋人のアン・エリオット(Anne Elliot)と彼の友人のキャプテン・ハーヴィル(Captain Harville)の女性論を聞くのも部屋である。これらは小説のプロット展開に重要な働きをする。前者はダーシーとエリザベスの互いに反目しつつも惹かれるアイロニカルな関係を，後者はアンとウエントワース大佐とのハッピー・エンディングをもたらすからである。部屋とはプライヴァシーのある程度の危機をもたらしつつも，人と人とを繋ぐオープンな場所なのである[26]。この点で，オースティンの部屋はロマン的閉じ込めのトポスの様相は帯びない。

部屋に限らず，オースティンの空間処理は閉じられているが，奇妙なことに開かれている機能も

示している。大きな屋敷，開かれた眺望の庭，波打つ芝生，豊かな森林は空間的には開かれているが，部屋と同様に閉じ込められた登場人物たちの交流のための場となるのである。『高慢と偏見』においては，たとえばエリザベスがダーシー，ハースト夫人，ミス・ビングリーと一緒にS字曲線のネザフィールド屋敷の庭を散歩するのを断わる場面は(1.10)は，空間的に開かれているが実は会話のための場となり，部屋とほとんど機能的差異はない。この際"The picturesque would be spoilt by admitting a fourth." (46)と言ってエリザベスが会話から抜けるのは，後に述べる彼女のピクチャレスク・ツアーの回避と結び付いて興味深い。またエリザベスがペンバリー屋敷の広大な庭をダーシーやガーディナー夫妻と散策するのは，彼らの会話とエリザベスがダーシーの人間性を探るための場となり，それは部屋と同様の機能を果たすのである。いわばオースティンの空間は心理が交錯するための，人間化された空間と言ってよいのである[27]。ベネット氏の書斎でのエリザベスの救出には，このようにオースティンの人間化された空間意識がその背後にあったのである。そして父の書斎での安らぎとペンバリー屋敷でのそれが同様のものであるならば，エリザベスの居所の移動は彼女の成長と父性の受け容れが平行していることの証となるに違いない。

エリザベスの父親には彼女への真摯な愛情があったのである。自分の財産の維持や管理の問題を考え併せれば，限定相続による被害を最も酷く蒙るのは母親よりもむしろ父親の方であろう。当然エリザベスにコリンズ氏との結婚を迫るのは，利害的には父親の方に相応しい行動であった。父親はエリザベスのことを思い，これをしないのである。限定相続や結婚市場に関する件は『高慢と偏見』の作品の本質を形成しておらず[28]，おそらくその本質はヒロインを中心とした人間の成長であろう。だが限定相続にまつわる事件は父性愛を強調する機能をもつ。エリザベスが駄目ならば，母親はメアリーでもコリンズ氏にくっつけようとする。コリンズ氏はエリザベスを諦めると，今度はシャーロット・ルーカスに求婚する。彼は三日間で二人に求婚したのである。シャーロットはこんな男でもあっさりと受け容れてしまい，ハンズフォード(Hunsford)の家に納まってしまう。女性に対する深刻な社会的圧力がこうした動きの背景にあるのは明確であろう。『高慢と偏見』の世界は社会的奥行きのある世界なのだ。ベネット氏はエリザベスを社会体制から保護したと言ってもよいのである。

Ⅳ

ダーシーのエリザベスへの保護は明確に父性的教育の要素を強くもつ。エリザベスはウィカムに騙され，ダーシーの人間性を見誤る。彼女には感覚的に，つまり瞬時に人の性格を見抜く能力はあっても，深い人間性を時間をかけて判断する洞察力には疎いところがあった。それは正されなければならない彼女のパーセプションへの信頼であった。エリザベスは他の五人の姉妹たちと連れだってコリンズ氏と一緒にメリトンの舞踏会に出かけ，ウィカムと会う。ウィカムは案外に率直な人間で，彼は自分の欠点を包み隠さずエリザベスに打ち明けている。彼は本質的には嘘をつきとおす偽善者ではない。だからエリザベスがウィカムを受け容れたのは自分自身の過失なのである。エリザベスは一度は自分で失敗を犯し，挫折感を味わった後でダーシーの保護を求めねばならないのだ。それはあたかも父親が子供を教育する姿に似ている。ダーシーのエリザベスへの求愛も，実はエリザベスの自己反省を促す父性的教育であった。

ウィカムの話術はエリザベスの偏見にうまく取り入って，彼女が自分から迷妄の世界へと踏み込んでいくようにさせるものである。ウィカムはまず自分が子供の頃からダーシー家と親交があり，

ダーシーに関しては自分ほど確かな判断のできる人間はいないと言う。エリザベスの最初の躓きは自分から"I have spent four days in the same house with him, and I think him very disagreeable." (68)とダーシーへの不快感を吐露したことである。"He is not at all liked in Hertfordshire." (69)とダーシーを中傷する時には，既にエリザベスは自己の弱みとも言うべき偏見的態度をウィカムに悟られてしまっている。その後ウィカムのすることは，ダーシーに関する悪い表層的データをエリザベスに与え，彼女が誤った推測をするのを許すだけである。『マンスフィールド・パーク』における牧師の義理の息子ヘンリー・クロフォード(Henry Crawford)よろしく，ウィカムは女たらしであるが，エリザベスには不思議と彼女が身を持ち崩すほどの誘惑はしない。それはウィカムの働きがエリザベスの教育に向けられているのと同時に，エリザベス自身がそこまでウィカムに入れ込むほど愚鈍ではないためであろう。

ウィカムの語ることはことごとく自分の都合のよいように作られた言説である。ウィカムの父親はダーシー家の地所の管理をしていたが，先代のペンバリー屋敷の当主，つまりダーシーの父親からは手厚い保護を受けていた。自分は先代から続いた援助をダーシー家から受ける権利を剝奪されたのだとウィカムは言うけれども，彼はその理由を詳細には説明していない。逆に一方的に相手の側の約束不履行ばかり非難するのである。彼の性格の胡散臭さが何やら伝わってくる。彼はダーシーの地位や財産を一方的に妬んでいる。先代のダーシー家の家長は優れた人物で，自分の親にも自分自身にも大変よくしてくれた。ウィカムはその行いをひたすら誉め讃えるが，その効果は現在の当主ダーシーの卑劣さを強調することに向けられていることを忘れてはならない。彼は自分が保護を受けられることを既成事実化しているのである。だが本当に自分がその保護を受けるに足り，ダーシーと対等に付き合える人間かどうかはどこでも一切問わないのである。これは彼の側での非常にエゴイステックな姿勢を明瞭にしている。なるほどウィカムは自分が貰うはずだった聖職禄をダーシーがとりあげたのは，自分には浪費癖や無思慮があったからだと匂わせる。だがその浪費癖や無思慮がいかなる内容のものであったのかを，彼は説明しない。ウィカムはもともと牧師になるつもりで勉強をしてきたのであるが，それをやめた理由を聖職禄譲渡に関わるダーシーの介入に押し付けている。それは表面的に見て事実であるが，ウィカムが牧師になることを諦めた内的葛藤は一切語られていない。エリザベスはウィカムの話の虚構ではないが，彼に都合のよい提示の仕方に惑わされているのである。

ウィカムの議論は表層的であるし，エリザベスの受け取り方も彼の外見に影響されている。ウィカムはダーシーが自分に嫉妬しているからこそ，こんなにも自分を酷く扱うのだと言う。このようにである。

> Had the late Mr. Darcy liked me less, his son might have borne with me better; but his father's uncommon attachment to me, irritated him I believe very early in life. (71)

ここには一片の自己反省もないし，われわれは少し考えれば彼の説明には理屈が通らないことに気付くのではないか。莫大な財産を相続するダーシーが，荘園管理人の息子にそんなに嫉妬する理由はどこにもないからである。エリザベスがこんな簡単な理屈に参ってしまうのは，単純にウィカムの愛想の良さやハンサムぶりに夢中になっているからであろう。この場面ではウィカムの見かけの良さを認めるエリザベスの姿が目につく。たとえばダーシーの人格を攻撃する時のウィカムの姿に，エリザベスは"[Elizabeth] thought him handsomer then ever." (71)という具合いにうっとりとしてしまう。ダーシーの残酷さが話題になった時のエリザベスはもっと面白い反応をする。

> Elizabeth was again deep in thought, and after a time exclaimed, "To treat in such a

manner, the godson, the friend, the favorite of his father!"—she could have added, "A young man too, like *you,* whose very countenance may vouch for your being amiable"... [emphasis mine] (71-72)

ウィカムによれば，ダーシーの父親はウィカム自身にとっても父親的な庇護者であった。父親に好かれる人間を良き人間として認識する，父性への信頼をエリザベスがもっていることは明らかである。それはともかくとして，彼女は言葉には出していないが，ウィカムを信頼する根拠として彼の男っぷりの良さしか胸にはないのである。この際私が下線で強調したように，言葉に出さない彼女の気持ちがオースティンの内面描写の巧みさを裏書きしているようだ。*"you"*の強勢はエリザベスのウィカムへの深い信頼感を表わし，逆に"deep in thought"はちっとも深くないエリザベスの思慮をアイロニカルに照射している。ウィカムの外面こそ，エリザベスの恋の対象なのである。

ウィカムのダーシーへの攻撃の最終的な根拠は，彼がとんでもなく高慢な人間だということである。だが，ここでは高慢の意味が巧みにずらされているように思われる。ウィカムはダーシーの高慢さを"almost all his actions may be traced to pride;—and pride has often been his best friend" (72)と強調する。その高慢さの現れは，ウィカムによれば，このようである。

Yes. It [Pride] has often led him [Darcy] to be liberal and generous, —to give his money freely, to display hospitality, to assist his tenants, and relieve the poor. Family pride, and *filial* pride, for he is very proud of what his father was, have done this. (72)

ダーシーは使用人に対して実に優しくしてやっているのである。小作人や貧民に対する慈善の精神は，閉鎖的に名家の誉れに留まる人間にできることであろうか。またウィカムは*"filial"*に強い意味をもたせているようであるが，ここで彼の論理は破綻をきたしているように思われる。ウィカムがダーシーの父親を誉め讃えたことを思い出して欲しい。もしダーシーが父親を誇りにしているのならば，ダーシーが隣人に慈善を施しているのはその立派な父親に倣って行なっているのだ，と考えるのが自然ではないだろうか。とすれば，これはまさしく家族あるいは家族的な近隣の集団への愛情の現れではないだろうか。ダーシーが小さな，身の回りの集団に接する時，「高慢」は「愛情」と読み換えて差し支えないと思われる。前のウィカムの引用においては"pride"を"affection"とでも言い換えた方が，現状をすっきり伝えていると思う。

この"pride"の"affection"への読み換えは，図らずもウィカム自身がその信憑性を裏書きしてしまっている。ダーシーが妹ジョージアナ(Georgiana)を可愛がることを評して，ウィカムはこう言う。

He has also *brotherly* pride, which with *some* brotherly affection, makes him a very kind and careful guardian of his sister; and you will hear him generally cried up as the most attentive and best of brothers. (73)

またしても，ウィカムの論理の弱みはその強調したところにこそある。つまり*"brotherly"*や*"some"*という言葉は，ダーシーには兄に相応しい妹への愛情がたっぷりあることを示しているのであろう。ウィカムが挿入句で"affection"と漏らしてしまったことは，その解釈を支持していると思われる。逆に考えれば，ウィカムはダーシーの愛情のサークルに入れないことを嘆いているのである。ダーシーの高慢は愛情に基礎をもち，ウィカムはその愛情に与れない嫉妬に満ちた男なのだ。

ダーシーにはもちろん高慢さがある。それは家族的な同族集団の外にある，機能的集団に彼が接する時に示される。既に見た舞踏会での振舞いや，虚栄心に満ちたビングリー家やベネット家の人間たちとの接触を思い出せばよいだろう。ダーシーほどの身分も高く，金銭的にも豊かな人間になると，付き合う人間も選ばねばならない。彼は権力者や金持ちとうまくわたりあわねばならないし，

また彼らと共存もしていかねばならないだろう。自分の失敗はペンバリーの荘園の住民たちの生活に直接に跳ね返ってくるわけだから，外部集団の人間たちとの接触においては慎重にならざるを得ないのだ。そういう部分を差し引いてみても，やはり初対面の人間に高慢に振舞うのは人間的欠点である。ウィリアムズ(Michael Williams)によれば，ダーシーの欠点の大半は叔母のキャサリン・ド・バーグ夫人において現れていると言う[29]。それは経済的優位に基づく，上流意識と言ってよいだろう。しかし問題の根幹はダーシーには父親も母親もなく，レイディ・キャサリンが叔母ではあるけれども，後見人として母親的位置を占めているという点である。この点で母親的価値はこの血筋においても否定されているのはないだろうか。そしてベネット夫人が結婚市場での経済的収益を第一とし，娘の愛情を無視する態度と軌を一にして，レイディ・キャサリンもダーシーと自分の娘，ミス・ド・バーグとを結婚させて財産の分裂を防ごうとしている。ダーシーにも身分的に低い人間を見下すところがある。彼がビングリーとジェインの結婚に介入して，彼らを別れさせようとして画策したのはこうした高慢さが裏にあったからであろう。ダーシーは母の代理人の影響の下で経済的かつ身分的関係に敏感になり，外部の人間に対して高慢な態度を強化するのである。

さて，ダーシーがエリザベスに行なう求愛の父性的教育の側面を見ていこう。その求愛はダーシーがビングリーとジェインの仲を裂いたことへの弁明，ウィカムの本質の暴露，そしてダーシーの父性的愛の受け容れというコースを辿る。最後の恋愛の成就は場面がペンバリー荘園に移るので次節に譲るとして，先の二つについて考えたい。ビングリーとジェインの関係が何故かはかばかしく進行しない。気晴らしの意味もあって，ジェインはガーディナー夫妻に誘われてロンドンへ行く。エリザベスはその後を追うようにしてロンドンへ行き，一泊した後でハンズフォードへ行くことになる。例によって，エリザベスは父親が寂しがることが気がかりでしょうがない[30]。父親の側でも，素直に寂しい気持ちを打ち明ける。

> The only pain was in leaving her father, who would certainly miss her, and who, when it came to the point, so little liked her going, that he told her to write to him, and almost promised to answer her letter. (135)

そして，父親の代わりに出現するのがダーシーなのである。ダーシーはレイディ・キャサリンの屋敷ロージンズ(Rosings)に泊まっている。ハンズフォードといい，ロージンズといい，経済的原理が最優先する場所である。前者は金銭的関係で結ばれたコリンズ夫妻の居所，後者は財産や身分を重んじる家系である。こんなところで情愛に基づくダーシーとエリザベスの関係が確立されていくのは皮肉なことであった。

ダーシーは突然にハンズフォードのエリザベスの部屋に入り込んで，抑え込んできた彼女への恋心を吐露する。実は彼は一度エリザベスの部屋を訪問したことがあったが，ほどなくシャーロットと彼女の妹のマライア(Maria)に邪魔されて想いを遂げられなかったのだ。ダーシーはある程度の想いをエリザベスに既に伝えていた。彼はロージンズ邸でのパーティーで自分の気持ちを素直に言えないのが自分の欠点であると言った。また以前にエリザベスの部屋で，彼は彼女がいつまでもロンボーンにいることにはならないだろうと言ったこともあった。こうしたモーションにも拘らず，ダーシーへの偏見に満ちたエリザベスは完全に彼の気持ちに盲目であった。

しかし，会話によるエリザベスの盲目からの解放[31]は不可能であった。いったん話されたらその場で消えていく言葉は，深い理性を働かせる余地がないからである。会話とはエリザベスの支配する領域なのである。つたない調子で，ダーシーはせつない想いを打ち明ける[32]。

> In vain have I struggled. It will not do. My feelings will not be repressed. You must

allow me to tell you how ardently I admire and love you. (168)

エリザベスはフィツウィリアム大佐(Colonel Fitzwilliam)から，ダーシーがビングリーとジェインの結婚話をわざと壊したことを教えられている。大佐はさらにその理由として，ダーシーがエリザベスの叔父の一人が田舎弁護士であり，もう一方の叔父がロンドンで商売人をしていることが気に入らないからだろうと吹き込む。要するに，エリザベスにとってダーシーは社会的身分に拘る，最悪の高慢に冒されている人間として映ったのである。こうした偏見をもつ人間に言葉による議論は不可能なのである。ダーシーは家柄が違えば，理性的に考えて簡単には恋愛は成就しないだろうと縷々述べる。ところがエリザベスにはダーシーが恋愛には絶対の自信をもっているように思われた。エリザベスは彼がビングリーとジェインの関係を裂いたことを非難する。また，返す刀で彼女はウィカムの言うダーシーが彼に行なった酷い仕打ちをも攻撃する。これに対しダーシーはベネット家の社会的地位の低さを率直に指摘し，自己弁護をする。彼はウィカムの件は予測していなかったらしく，明確に弁解はしていない。

ダーシーの説得が長い手紙の形で行なわれるのは意味のあることである。それはエリザベスが長い時間をかけて，確かな情報を積み上げ，理性的な判断を下すことを可能にする。エリザベスはダーシーに理性的に推論することを教えられるのである。エリザベスはウィカムに騙されかかり，フィツウィリアム大佐のような他人の意見に惑わされやすい，偏見の持ち主であることをダーシーの前で示した。これは頭の回転の早さが取柄の彼女にとっては，大きな失態であった。しかし人は失態を乗り越えて，成長しなければならない。ダーシーは一度エリザベスに失敗させておいて，自分からその失敗に目覚めさせようとする。この教育姿勢は後にみるようにベネット氏が末娘のリディアに接する態度と同じである。ダーシーは父親のようにエリザベスを教育していくのである。

エリザベスは最初ダーシーの手紙が単なる傲慢の証に過ぎないと思い，再度の無礼に激怒する。しかしよく考えてみると，ダーシーの言っていることは全体として辻褄が合い，完全無謬であることがわかってくる。ダーシーはまず彼がビングリーとジェインの仲を裂いたことを弁明する。ダーシーはジェインがビングリーに何ら愛情らしきものを示さないので，彼女は彼を愛してはいないのではないかと疑う。彼はこのように書いている。

Her ［Miss Bennet's］ look and manners were open, cheerful and engaging as ever, but without any symptom of peculiar regard, and I remained convinced from the evening's scrutiny, that though she received his ［Bingley's］ attentions with pleasure, she did not invite them by any participation of sentiment. (175)

エリザベスは姉がなかなか感情を面に出さない性格であることを知っており，どうしても情感の少ない女性と思われがちであることを認める。まずはダーシーの推測は客観的に見て正しいものであった。次にダーシーはジェインの売り込みに際しての，ベネット家の無作法な振舞いを非難する。

The situations of your ［Elizabeth's］ mother's family, though objectionable, was nothing in comparison of that total want of propriety so frequently, so almost uniformly betrayed by herself, by your three younger sisters, and occasionally even by your father. (176)

確かにネザフィールドのパーティーでのベネット夫人と娘たちの振舞いは無作法極まりないものであった。ベネット夫人はルーカス夫人に勝ち誇ったかのようにビングリーとジェインの結婚話を聞かせる。それにも飽き足らずベネット夫人は，ジェインの結婚後は上層階級の人々と繋がりができ，次々と娘たちが金持ちの人々と結婚するのだと言い触らす。しかもこれはダーシーの目の前で行なわれるので，取り澄ましたダーシーへの対抗意識が裏にあることは明白であろう。おまけにメアリ

ーは恥ずかし気もなく，知識をひけらかすだけの歌を歌う。エリザベスはダーシーの指摘が正しいと推論する。

しかしウィカムをダーシー家から追い払ったことへのダーシーの弁明は，未だ合点のいかないものであった。ダーシーの手紙によれば，ウィカムは自分から聖職禄を辞退して，その代わりにもっと金が儲る仕事に就く援助をしてくれと願い出たらしい。それは法律関係の仕事であったらしい。ダーシーはウィカムが牧師には相応しくない人間であると理解していたので，すぐにその援助願いを受け容れた。しかしウィカムがその経済的援助でしたことは，ダーシーによればこういうことであった。

> In town I believe he chiefly lived, but his studying the law was a mere pretence, and being now free from all restraint, his life was a life of idleness and dissipation. (179)

おまけにウィカムは援助を打ち切ったダーシーへの腹いせに彼の妹のジョージアナを誑かして駈落ちの寸前までいったという話である。ウィカムに参っているエリザベスはすぐにはこの説を信用はしない。彼女はほとんど記憶するまでダーシーの手紙を繰り返して読み，その内容と実体験を照らし合わせてダーシーの説を受け容れるのである。

ダーシーの手紙のエリザベスへの影響は彼女がロンボーンの家に帰ってからも続く。いや，その後のエリザベスの人間の見方一般に影響したと言ってもよい。ロンボーンではエリザベスは彼女の姉妹たちのがさつな態度に嫌気がさし，自分の「家」の欠点にはっきりと気付く。彼女はダーシーの反対意見が正しかったことを実地で体験するのだ。特にリディアはフォスター大佐(Colonel Forster)の奥さんから歓楽地のブライトン(Brighton)への旅行へ誘われ，有頂天になっている。キティ(Kitty)はそれを地団太踏んで悔しがっている。尻軽のリディアが誘惑の多いブライトンで，悪い男に騙される可能性は十分にある。そこでエリザベスは父親にリディアのブライトン行きを止めさせ，一家のモラルを向上させてくれと願い出る。さらに，リディアにいつも従っているキティへの悪影響も心配である。しかし，父親の返事はこうだ。

> At Brighton she will be of less importance even as a common flirt than she has been here. The officers will find women better worth their notice. Let us hope, therefore, that her being there may teach her own insignificance. (205)

ベネット氏はリディアには一度は痛い思いをさせなければ，自分のアイデンティティが見えないだろうと言うのである。さらにリディアにはフォスター大佐という，ベネット氏の信頼する"a sensible man" (205)が付いて行く。大佐はいわば父親の代理としてリディアの言動の観察に当たるのである。これはダーシーが何回かの舞踏会でエリザベスの言動を見守っていたのと同じ構図を成している。つまりダーシーはエリザベスにとって，父性的な観察者であったのである。

エリザベスはダーシーによって開眼されて，ウィカムの魂胆や不自然な慇懃ぶりを見抜くことができるようになっている。彼女はハンズフォードでは，ロージンズ邸に滞在しているダーシーやフィツウィリアム大佐に会えたと語る。彼女はその時のウィカムの不快な顔つきを見逃さない。この二人はウィカムの後見人であり，彼の過去の行状を全て知っているはずだからだ。エリザベスが自分は徐々にダーシーの人間性がわかってきたと語ると，さらにウィカムは落ち着きを失ってしまう。ダーシーへの自分の中傷が感づかれた公算が高いからだ。彼の狼狽ぶりは"Wickham's alarm now appeared in a heightened complexion and agitated look." (208)という表現に明らかである。エリザベスはピクチャレスク趣味やゴシックへの愛好症によって対象を見損なうという症状は示さない。それでも彼女にも迷妄はあったのである。それはウィカムへの密かな憧れである。この意味で合理

的な判断力に優れていたように見えるエリザベスにも，オースティンの作品によく認められる精神の迷いの状態はあったのである[33]。ダーシーのエリザベスへの教育は正しく対象を「見る」ことに基づいていた。徹頭徹尾正しくものごとを観察することがヒロインの教育の規範になっていたのである[34]。

このようにエリザベスが成長するのは印象や感情といった不確かなものよりも，確かな観察眼に基づいて得られた経験と正しい理性的推論によるのである。これは要するに18世紀的な啓蒙精神が生んだ経験的認識論の思想に沿っている。タナー(Tony Tanner)はロック(John Locke)やヒューム(David Hume)の認識論がその基礎にあると言う[35]。デヴリィン(D. D. Devlin)はオースティンがシャフツベリーの感情主義を排して，ドクター・ジョンソン(Dr Johnson)的な理性主義の態度を堅持していると言う。シャフツベリーは人間は生来善なるものであるから，その性質に従い，感情の発露を促せば，人性は全うされると考えた。オースティンはそれに対して人間は教育されてこそ，完全なものになると考えているのである[36]。エリザベスのパーセプションの鋭さは，悟性あるいは理性による内面的な処理を経て陶冶されなければならない。そこには内的な啓発が含まれていたはずである。

そこで，改めてエリザベスは自分の「家」を眺めてみる。彼女のクリアーな眼差しは自分の「家」の最大の問題点を教えてくれた。彼女はそれが父親と母親の夫婦関係がその元凶であると認識するのだ。ベネット氏はただ若さと美貌だけが魅力で，表層的な愛想の良さだけが取柄の女性と誤って結婚してしまったのだ。エリザベスの母親となる，その女性は判断力も弱くて心も狭量であった。そして家庭の幸福は完全に覆ってしまったのである。エリザベスの母親への批判は辛辣である。しかし彼女は父親には至って優しい。父親の楽しみとはこのようなものである。

> He was fond of the country and of books; and from these tastes had arisen his principal enjoyments. (209)

これらはダーシーの喜びと大して変わるところがないのではないだろうか。彼もまた，森と読書を愛する人であった。ベネット氏は積極的に家庭のモラルを正そうとはせず，夫として優れたところは見当らなかった。こんな父親でもエリザベスは明らかに許しの姿勢を取っている。彼女の態度はこうである。

> ...she endeavoured to forget what she could not overlook, and to banish from her thoughts that continual breach of conjugal obligation and decorum which, in exposing his wife to the contempt of her own children, was so highly reprehensible. (209-10)

エリザベスは父親の欠点を見ないようにしている。彼女の父性主義を愛する傾向は明瞭であろう。そして父性主義は彼女にとって成長の基点となっている。ベネット氏自体は性格が弱い，決してでしゃばらない人格的空所を成している。このシニフィエを欠くようなシニフィアンの父親の位置に，エリザベスは今や自分の中ではっきりとイメージを結んだダーシーというシニフィエを埋め込むのではないだろうか。それは古いベネット「家」を出て，新しいダーシー「家」を形成する動きである。コーエン(Paula Marantz Cohen)というフェミニストはオースティンの娘たちは二つの顔をもつ，と言う。それらは家族関係の調停者で父権的秩序の維持者と，家族から離反し新しい愛情中心の家庭をもつ者である[37]。コーエンの主張にも拘らず，オースティンのヒロインの場合は新しい家庭をもつ時も，父権の維持を前提としているように思われる。エリザベスの場合も然りである。そしてガーディナー夫妻と一緒に行く北方，つまりダービーシャーへの旅は，彼女にとって父性主義に基づく新しい「家」を獲得するための旅でもあったのである。

V

エリザベスの北方旅行はダーシーの人間性を正しく認識し，彼の愛情を受け容れるための旅であった。いわば，この旅は彼女にとって教育的な意味があったのである。彼女は旅の途上で有名なピクチャレスク的風景の景観地を訪れるはずであった。しかしながら，これは作者の意図的な介入によって回避される(38)。『高慢と偏見』の中で，作者が露骨にしゃしゃり出る場面はここだけであろう。しかしエリザベスの認識論的な発達の側面から見れば，唐突な作者の介入によるピクチャレスクの回避は必然性のある旅程の変更であったのである。またピクチャレスクの回避は，その後のペンバリー荘園やその屋敷内の家具調度品類の讃美，そしてダーシーの人間性の把握へと向かうエリザベスの心理の変化相と密接に繋がっている現象であった。このようにしてエリザベスが認識し，そして受け容れたダーシーの愛は，父親によって認められて初めて正当な愛情であったことが判明する。エリザベスは父性によって支えられ，保証された家庭に入るのである。彼女が身を投げたのはダーシーの胸であるが，心理的にはそれは父親への回帰でもあったのである。

エリザベスが北方旅行に出発する二週間前になって，急にガーディナー氏に用事ができ，予定していた旅行は切り詰められる。湖水地方は言うに及ばず，ダービーシャー以北の土地にも足を踏み入れることはできなくなる。いかにも偶然の出来事であり，われわれは「機械仕掛けの神」(deus ex machina)に操られているような感覚を抱かざるを得ない(39)。さらにオースティンはエリザベス一行が通ったダービーシャーの数々の名勝の描写についても頑として拒絶する。

> It is not the object of this work to give a description of Derbyshire, nor of any of the remarkable places through which their route thither lay; Oxford, Blenheim, Warwick, Kenelworth, Birmingham, &c. are sufficiently known. A small part of Derbyshire is all the present concern. (213)

19世紀前半の小説の読者にとっては，いかにも肩すかしを食わせるような台詞であろう。特にゴシック小説に出てくるような荒々しい風景や，それとは対照的な光溢れる優しい風景を期待する女性を中心とした読者層には，このピクチャレスクの拒否は意外なことと思われたに違いない。オースティンのこの風景への意識に関する分析には野島秀勝氏の優れた論考がある。野島氏は『高慢と偏見』におけるピクチャレスクの拒絶とペンバリーの庭とを繋げて論じ，オースティンの自然には人物と人物の関係や，物語の意味が充塡していることを主張しておられる(40)。しかしこの論考にはピクチャレスクがもつ，風景の堪能者に対する認識論的意味の面からの視点が欠けているようである。そこでピクチャレスクそのものの美的性質の面から，何故エリザベスがピクチャレスク・トラベルに相応しい地域を割愛して旅行して行かなければならなかったかを考察したい。それは畢竟，彼女の精神的成長に至る筋道を辿ることになるのだから。

ピクチャレスクとはそもそも風景に美的枠を塡めて眺める鑑賞態度である。それは見る者に対して一定の視点から自然を眺め，一定の反応をするように強いるコンヴェンションなのである。風景を見る人間はいったんその風景に背を向け，クロード・グラス(Claude Glass)と言われる，予め薄茶色に淡く着色された楕円形の鏡を取り出すよう求められている。その鏡に横長に写された風景はまるでクロード・ロラン(Claude Lorrain)の絵のように見え，鑑賞者を堪能させたらしい(41)。まずは，ピクチャレスクとはこのように眺めるべしと決まっていたのである。その反応にしても一定であるように思われる。ギルピン(William Gilpin)は一連のピクチャレスク・ガイドブック(42)で，読者をイ

ギリスの景勝地を実地に歩き，それらを鑑賞しているような気分にさせてくれる。このギルピンはピクチャレスクと美しいもの(the *beautiful*)の区別をして"*roughness* forms the most essential point of difference between the *beautiful* and the picturesque." (6)[43]と論じる。美(beauty)に関して，彼は詳しく"one source of beauty arises from that species of elegance, which we call *smoothness,* or *neatness.*" (4)とその起源を説明している。美とは「すべすべしていること」("smoothness")や「滑らかさ」("neatness")が生み出す美的効果である。それに対して，ピクチャレスクは「荒々しさ」("roughness")や，特にその程度の際立った場合は「ぎざぎさしていること」("ruggedness")(7)がその主要因であった。こうしたピクチャレスクの美的特徴は"which makes objects chiefly pleasing in painting" (6)と言われているように，特に予め絵画にした場合に美学的感興を呼び起こすものと想定されていたのである[44]。美的なものやピクチャレスクなものの性格は既に決定され，ピクチャレスク・トラヴェラーたちはその美学の文法をただ受け容れるしかなかったのである。そうしてみれば，彼らは美的には盲の状態にあったのである。

このピクチャレスク的ものの見方を認識論的に考察すれば，それは自分の目ではなく，他者の押し付ける視点で風景を眺める態度と言えはしないだろうか。それは概ね社会が要請するような憶説や曖昧な印象といった，捕らわれた視点でしかものを見ない態度である。それは迷える人間の視点と言ってもよかろう。『高慢と偏見』のコンテキストでこれを考えれば，エリザベスの陥っていた偏見とは人間性へのピクチャレスクな見方を意味していたと思われるのである。ピクチャレスクなパースペクティブとは色眼鏡をかけたような，あるいは対象に背を向けたような見方であり，およそ人間性へのクリアーな視点を提供するとは思えない。ピクチャレスクとはエリザベスが是非とも避けねばならなかった，歪んだ視点であったのである。

ピクチャレスクをくぐり抜けて，エリザベスはペンバリー荘園，その屋敷の内部，さらにダーシーの内面へと求心的に視線を移動させる。この運動は理性の働きによりダーシーに関する情報を積み上げ，彼の本質を把握するに至る認識力の訓練であった。この理性主義はもともと彼女がもっていたものであった。『高慢と偏見』のごく最初の部分で，エリザベスとシャーロットが結婚生活のあり方について議論をする場面がある。シャーロットの夫婦はお互いの欠点に目をつぶるべしという主張に対して，エリザベスは夫婦がはっきりとお互いの欠点を理解し合わない限り，正当な結婚生活はあり得ないと言う。彼らの結婚生活は事実この通りになるのである。シャーロットはコリンズのレイディ・キャサリンへの馬鹿げた追従主義に気付きながらも，なるだけそれに目を向けないようにしている。たとえばハンズフォードの家の大きくて明るい部屋が居間ではなく食堂として使われていることには，それなりの理由があった。つまり女性たちがその雰囲気の良い居間に長居するようになると，必然的にコリンズ氏もそこに居ついてシャーロットと多く接触することになるからである。シャーロットにしてみれば，夫はできるだけ長く書斎に籠って，ド・バーグ夫人一行の乗る馬車でも眺めていてもらえれば一番気が楽だからである。エリザベスの場合は相互理解に立ったもっと緊密な夫婦関係が樹立される。最初にダーシーがエリザベスを観察して，彼女の人間性をよく理解する。次にエリザベスがダーシーの身の回りのものや人間たちから，彼に関する情報を得て，しっかりとした証拠の上に立って，彼の人間性を理解するからである。ここでダーシーがエリザベスに書いた，あの長い手紙が大きな意味をもってくると思われる。エリザベスはダーシーの手紙を解読することによって，生来もっていた理知的性質を働かせ，一つ一つ身の回りの事実を吟味し，ベネット家の欠点やウィカムの本質を「知る」ように教えられた。エリザベスは同じように理知的に論理を積み重ね，今度はダーシーの人柄を「知る」ことが求められているのである。ありのまま

の真実を認識するという側面で，彼の手紙を読むことはモデル化されたエリザベスの人間理解の様式であった。彼の手紙を読むこととダーシーの人間性を読むことは，エリザベスにとって連続した知的作業だったのである。

ペンバリー荘園は大変に素晴らしい眺望の中にあった(45)。その屋敷と回りの風景の様子はこのようである。非常な重要な風景描写を多く含んでいると思われるので，家の外観の描写が始まるところからエリザベスの反応まで，少し長くなるが引用したい。

> It [Pemberley House] was a large, handsome, stone building, standing well on rising ground, and backed by a ridge of high woody hills;—and in front, a stream of some natural importance was swelled into greater, but without any artificial appearance. Its banks were neither formal, nor falsely adorned. Elizabeth was delighted. She had never seen a place for which nature had done more, or where natural beauty had been so little counteracted by an awkward taste. They [Elizabeth and the Gardiners] were all of them warm in their admiration; and at that moment she felt, <u>that to be mistress of Pemberley might be something!</u> [emphasis mine] (215)

敢えて少し深読みをすることを許されたい。いずれペンバリー屋敷の中に入ったエリザベスの心理と突き合わせれば，ある程度の整合性が得られるであろうから。ペンバリー荘園の眺望の素晴らしさはダーシーの心の広さを表わしているのではあるまいか。その屋敷の石造りの堅固な様子は彼の経済的な基礎を，また背後を守るかのような背の高い尾根は彼を守るしっかりとした人脈を表わしているのではないだろうか。その正面を流れている川はもともとは自然のものであったが，人工の力で川幅が広げられている。その土手には何ら人工的な変化が加えられた形跡はない。これらはダーシーが無理に撓められたり，歪められたりしていない，無垢な心情の流れを保持していることを暗示してはいないだろうか。そうしたダーシーの自然な，飾りの無い，純粋な人柄に接した時，引用文中私が強調したエリザベスの間接話法とも，描出話法ともとれる感嘆の声が流れるのはごく当然と受け取られるだろう。ペンバリー屋敷の女主人になることは，ダーシーの愛を受け容れることと瞬間的に交錯する。自然の讃美とダーシーへの憧れは照合するのである。ペンバリー荘園の風景は人間化され，エリザベスにとってダーシーの人格を表わすようになるのである。

屋敷の中に入っても，エリザベスはダーシーの情報を集めている。家政婦のレノルズ夫人(Mrs Reynolds)は威厳のある面持ちの，相当年輩で慇懃な女性であった。部屋から眺めた荘園の眺めも格別であった。家具調度品の類も派手さはなかったが，いかにも優雅で趣味の良いものばかりであった。これらは主人のダーシーの飾りのない，率直な人柄の支えとなる。エリザベスはダーシーの肖像画も見せられる。その肖像画に対するガーディナー夫人とレノルズ夫人の評価に応じて，エリザベスもダーシーの顔立ちを"Yes, very handsome." (217) と言ってしまう。さらに彼女はレノルズ夫人からダーシーがけっして家政婦に小言など言わない，優しい心の持ち主であると聞かされる。レノルズ夫人は"If I was to go through the world, I could not meet with a better." (218) と言い，ダーシーが考えられる最上の主人であることを受け合う。エリザベスはレノルズ夫人が威厳のあること，年齢，家政婦としての丁寧さの点から信用のできる女性であることは否めない。レノルズ夫人はダーシーが小作人にも，使用人にも同様に気配りを欠かさない優しさをもっていると言う。屋敷の二階の広いロビーに入っても，この立派な部屋はダーシーが妹のジョージアナのために改装させたものだ，とエリザベスは家政婦に教えられる。ダーシーは家族集団を大事にする，立派な主人だったのだ(46)。エリザベスがこうしたことを聞かされる場面に，ガーディナー夫妻といういわば傍聴人が立

ち会っていることも忘れてはならない。これはレノルズ夫人の情報の確かさを検証する役目を彼らに負わせるためなのである。かくして，エリザベスはダーシーについて暫定的にこういう評価を与える。

> As a brother, a landlord, a master, she [Elizabeth] considered how many people's happiness were in his guardianship!—How much of pleasure or pain it was in his power to bestow!—How much of good or evil must be done by him! (220)

ダーシーが申し分のない主人であることは確認できた。後でエリザベスがするべきことは彼が夫として自分に価値があるかどうか，見極めることである。

オースティンは必然的な筋立てを伴って，偶然的な出来事を小説中にもち出してくる。執事への連絡事があり，ダーシーはエリザベス一行の帰りぎわに荘園に到着する。エリザベスにはダーシーの態度が以前に別れた時から全く違って見える。おそらくダーシーは実際に，とっさに遭ったエリザベスにスポンティニアスな形で，彼本来の家庭的集団を重んじる態度を示したのだろう。庭師に指示されて，ダーシーやガーディナー夫妻と荘園を回る時も，素晴らしい景観はエリザベスの目には入ってこない。彼女の思いは"Her thoughts were all fixed on that one spot of Pemberley House, whichever it might be, where Mr. Darcy then was." (222)と，ダーシーの姿に釘付けになっている。ペンバリー荘園が自然風庭園であることは間違いあるまい。しかし，その庭園の美しさを微に入り細を穿って描くことは，オースティンはしない。彼女のペンバリー荘園の描き方は，驚くほどあっさりとしている。その唯一の力点の置かれた点は，それが自然らしさを保っていることである[47]。川にかかった簡素な橋は"in character with the general air of the scene" (223)であり，その先は自然そのものに近い場所であった。自然らしさはダーシーの素朴で，飾らない人柄にまた還元されていく。というのは，その後はダーシーは釣り好きのガーディナー氏と身分が格段に違うにも拘らず，釣りの話に興じ，彼を荘園での釣りに誘ったりしているからである。ペンバリー荘園の自然は人間化されて，屋敷内部の部屋や家具類と同じくダーシーの人間性を伝えるようにされているのである。よって，ペンバリー荘園訪問はエリザベスにとって理性的認識のための教育の一過程であった。しかしながら，エリザベスがダーシーの愛情を受け容れるにはまだ数カ月をかけて彼への認識を深め，二人の間の誤解を解かねばならない。それはますます彼女が父性的価値に惹かれていく傾向を強めることを意味したのである。

その傾向の先鋭化をもたらしたのがリディアの駈落ちである。それはさらにエリザベスを母親から父親へと接近させる事件であった。父親と母親はリディアの駈落ちに対して，対照的な反応を見せる。彼女はウィカムと駈落ちし，ロンドンで結婚式を挙げるつもりらしい。ベネット氏はフォスター大佐とともにロンドンへ彼らを探しに出かける。母親の激怒ぶりはすさまじい。彼女は娘たちに"tears and lamentations of regret, invectives against the villanous conduct of Wickham, and complaints of her own sufferings and ill usage" (253)を撒き散らす。しかしながら，"blaming every body but the person to whose ill judging indulgence the errors of her daughters must be principally owing" (253)に見えるように，リディアをこんな我儘な娘に育てた，当の自分自身の非は認めない。これとは対照的にリディアを探し出せずにロンドンから帰ってきた父親は，その非を敢えてわが身に受けようとする。エリザベスが彼の苦労を労うと，うち沈んだ彼は"Say nothing of that. Who should suffer but myself? It has been my own doing, and I ought to feel it." (264)と答える。

リディアのウィカムとの結婚が決まった時も，父親と母親の態度は衝突を起こす。ベネット夫人

は明らかに異常に多幸症のような態度を見せる。駈落ちした二人の結婚の取り決めに関するガーディナー氏の手紙を読んだ時，彼女の感情的な反応はこうである。

> 'My dear, dear Lydia!' she cried: 'This is delightful indeed!—She will be married!—I shall see her again!—She will be married at sixteen!—My good, kind brother [Mr Gardiner] !—I knew how it would be—I knew he would manage every thing...' (270)

女性の職業選択が制限されていた時代には，結婚とは大きな意味をもったことであろう。しかしながら，それを差し引いてもベネット夫人には明らかに「愚鈍さ」が性格付けされていると考えざるを得ない。彼女は掌を返したように今までと態度を変え，16歳で結婚するリディアを讃える。しかし彼女はそれがどういう種類の結婚であり，どういう生涯をこの我儘娘が辿ることになるかを考えていないのである。これに対してベネット氏はもっと理性的な態度をとる。彼はこのように，リディアの結婚にあからさまに不快感を表明する。

> Mrs. Bennet found, with amazement and horror, that her husband would not advance a guinea to buy clothes for his daughter. He protested that she should receive from him no mark of affection whatever, on the occasion. (274)

おそらくベネット氏は不本意な形での娘の結婚に決して賛同できなかったのであろう。今までの育て方で，明らかにリディアは躾の足りない，歪んだ性格の娘になってしまった。さらにこれから先に彼女が伊達男のウィカムと結婚しても，幸せになれる可能性は薄いであろう。とすれば，幸薄いこんな形での結婚に賛同したくないのが自然な親の心理ではないだろうか。ベネット氏はリディアを愛していないのではなく，彼女の将来を憂えた上での反応をしたまでのことである。リディアの駈落ちはベネット家の両親の娘たちへの愛のあり方を示す典型的な例であった。父親はブライトン行きを望むキティにも"you are never to stir out of doors, till you can prove, that you have spent ten minutes of every day in a rational manner" (265)と厳しく，道徳的に振舞うことを求める。母親は"To know that her daughter would be married was enough." (270)と表現されているように，娘の本当の幸福には無頓着で，何の自己反省のかけらもない人間である。ベネット家の家計が"Mrs. Bennet had no turn for economy, and her husband's love of independence had alone prevented their exceeding their income." (272)というように父親の努力のみで維持されてきたのと同様に，モラルの面でも父親が「家」の秩序維持者なのである。そして理性的なエリザベスが父親には寄り添い，母親には冷淡なそぶりしか見せないのは当然なのである。

リディアのウィカムとの結婚がダーシーによってアレンジされたのは，象徴的なことである。ダーシーはベネット氏がやらねばならなくても，やりたくないことを代理で行なっているように見える。ウィカムはリディアがベネット氏の存命中は毎年100ポンド，死後は5千ポンドの財産譲渡の応分の額を受け取ることで，彼女との結婚を引き受けた。ただしこれには裏があって，ウィカムの借金返済や士官になるための費用，リディアの贈与額の上乗せなど，ベネット氏が支払い難い多額の金銭がウィカムに流れていた。負担したのはダーシーである。また嫌なウィカムの結婚式に出席したのも，ダーシーである。とすれば，ダーシーはリディアの父親としてのベネット氏の役割を果たしていることになるのではあるまいか。ダーシーの行動はベネット氏のそれを引き継いだものであったのだ。

リディアの駈落ちはエリザベスにとっては，自らのダーシーへの愛を確証するための試練であった。彼女はリディアの一件に関するジェインの手紙をラムトン(Lambton)で受け取り，驚愕のあまり咽び泣きながら，思わず彼に手紙の中身を話してしまう。これはエリザベスにとっては一家の恥を

一番知られてはならない人に晒してしまう，愚行であった[48]。このために彼女は，ダーシーからは見捨てられてしまったのかと悩まねばならない。この苦しみの中で彼女は本当に自分が愛していて，必要であったのが"never had she so honestly felt that she could have loved him, as now, when all love must be vain" (245) というように，ダーシーその人であったことを悟る。だが，認識は苦痛であった。オースティンは鮮明にエリザベスの苦悩を"had she known nothing of Darcy, she could have borne the dread of Lydia's infamy somewhat better" (264) というように伝えてくれる。この辺りのエリザベスの思考法は全て過去遡及的であり，彼女がダーシーへのハンズフォードでの態度を取り消したいと思っていることを示している。ダーシーが自分で費用を出し，怒りを押さえてウィカムとリディアの結婚式を挙げさせてやったことがわかると，安堵感とともに最高潮の苦しみがエリザベスを襲ってくる。

> It was painful, exceedingly painful, to know that they [the Bennets] were under obligations to a person who could never receive a return. They owed the restoration of Lydia, her character, every thing to him. (289)

ダーシーはリディアを助け上げ，ベネット家を危機から救ったのである。それは「家」を守る父性的行為そのものの現れであった。エリザベスはダーシーに感謝を感じつつも，悪し様に彼を扱ってしまったことを強く後悔する。同時に彼女は彼を本当に誇りに思う。

> For herself she was humbled; but she was proud of him. Proud that in a cause of compassion and honour, he had been able to get the better of himself. (289)

エリザベスのダーシーへの愛情は彼を父親の如く，尊敬し，誇りに思うことで完成する。事実，彼の行いは「家」の保護者としてのそれであったのだから。

ダーシーからエリザベスへの愛情はそれとは全然逆向きの動きをする。ダーシーは父親然とした与える愛を放棄し，夫として対等の立場でエリザベスを愛することを望んでいるようだ。ウィカムとリディアが無事結婚し，ビングリーも本来の気持ちを大切にしてジェインを受け容れることを決めた後，落ち着いた雰囲気の中でダーシーとエリザベスは会見する。ダーシーは自分にはエリザベスに負うべき点があると言う。それは昔の高慢と自惚れに縛られた自己から脱皮して，広い社会に順応できる開かれた自己に成長することができたということである。彼の"I have been a selfish being all my life, in practice though not in principle." (328) という言葉は，あるフラストレーションを表わしていると思う。そこには自分を開きたいが，地位の高さによって自己を保護し，社会的身分を問わない他者と交わることを拒絶する人間の煩悶がある。ダーシーの住まうペンバリー屋敷は彼の子供時代からの虚弱な自我を守る避難所でもあったし，同時に他者に自己を開くことを禁じる牢獄でもあった。そうであるから，彼はこのように家庭的集団を越えて人間関係を結べないのである。

> I was spoilt by my parents, who though good themselves,...allowed, encouraged, almost taught me to be selfish and overbearing, to care for none beyond my own family circle, to think meanly of all the rest of the world, to *wish* at least to think meanly of their sense and worth compared with my own. (328)

ダーシーはエリザベスを愛することによって，あらゆる社会階層の人間たちとふれ合える，新しい人間に生まれ変わった。それはおそらく自分の悩みのもとであった高慢さを，よりによって一番好きな女性によって酷評される，痛みを伴ったものであったであろう。痛みのない成長はないのである。よって過去の自分を振り返って，ダーシーの

> Such I was, from eight to eight and twenty; and such I might still have been but for you,

dearest, loveliest Elizabeth! What do I not owe you! You taught me a lesson, hard indeed at first, but most advantageous. (328)

という叫びは解放された男の喜びの声である[49]。ダーシーはベネット家の父親の代理として「家」を救い，エリザベスは尊敬の対象として彼を父親の位置に塡め込んで愛した。ダーシーとベネット氏を較べてみると，彼らが論理的な平行関係にあることがわかる。ベネット氏は書斎に静かに籠り，「家」の管理にはなるだけ出しゃばらず，また「家」の対外的な社会関係にも疎かった。書斎は彼にとって避難所であり，また父親の地位を確認するために最後に残された父性の砦でもあった。エリザベスの目から見て，書斎に籠りがちな父親は親しみを感じても，決して満足のいける，頼りがいのある男性ではなかった。しかし，ダーシーは違う。彼は社会的な自己を獲得し，対外関係に積極的に参加できる男となった[50]。これはベネット氏にはない，関心を外の世界に向ける徳目である。エリザベスにとって，ダーシーは書斎を出たベネット氏となったのである。ダーシーは家庭内での父性的優位性を保ちながら，互いに尊敬し合うことによってエリザベスと対等の愛情関係を獲得するのである。

ダーシーとの愛を確認できた後でエリザベスが父親と交わす語らいは，彼女が父性主義によって守られた，新しい「家」に移ることを意味している。ベネット氏が与える彼女とダーシーとの結婚の条件は，夫を目上の人間として尊敬できるかどうかということであった。彼の"I know that you [Elizabeth] could be neither happy nor respectable, unless you truly esteemed your husband; unless you looked up to him as a superior." (335) という言葉は，雄弁に父性優位の家庭をもつべしという教えを語る。感動したエリザベスはダーシーの愛情の確かさを誇らしくも"his affection was not the work of a day, but had stood the test of many months suspense" (335) と讃え，理性的認識に従って彼を愛するようになったことを主張する。エリザベスがダーシーを愛する仕方は，もとより彼を尊敬するという形で起こったのである。とすれば彼女は最初から父親の指示に従って，理想の夫を探していたことになるのだ。この意味でエリザベスは父の娘であり，母のそれではなかった。母親はエリザベスとダーシーの結婚による経済的利益しか喜ばず，最後までオースティンの戯画化された愚妻像のままにとどまっている。ベネット家では未熟で歪められていた父性主義が，ダーシー家では豊かに実現するのである。エリザベスの嫁入りはシンデレラ物語の変型であるかもしれない。しかし，そこには古い「家」から新しい「家」に移り，「家」そのものの質が変化するという面が含まれていた。オースティンのシンデレラ物語の受容の仕方には，家族関係の秩序の再編成の問題が絡んでいる。彼女はシンデレラたるエリザベスの恋人に，最初に彼女を妹として愛させ，彼女に無視の愛を示したり，彼女の親族に親愛の情を示させたりする[51]。このことで，父親を中心としたパターナリステックな家族秩序が再編成されるのである。そして，エリザベスは彼女の旧家族の母親の地位をいわば簒奪するのである。父親的男性を愛する過程でエリザベスは苦しみ，人を見る目を養い，人間的に成長を遂げた。ヒロインの視点に立てば，『高慢と偏見』の教養小説(Bildungsroman)的側面は明瞭であろう[52]。しかし，そこには個人の成長にのみ還元されない部分が残っている。ダーシーとエリザベスの父性原理に基づく結合は，階級間の断絶を乗り越える行為であった。一方には広大な荘園を所有する，裕福な男性の「家」がある。他方には二重規範によって職に就けず，限定相続で屋台骨を揺さぶられ，後は有利な結婚に頼るしかない中流の娘たちの「家」がある。ダーシー家とベネット家は，オースティンの作家としての目が届く範囲の社会の典型的な矛盾を象徴する家族集団であった。オースティンにおける父性愛はこれらの矛盾を克服し，社会をあたかも大きな一家として包摂していくのである[53]。

この態度は18世紀の代表的女権論者のメアリー・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft)が，家庭と国家のアナロジカルな関係を"A Man has been termed a microcosm, and every family might also be called a state." (299)[54]と論じたことと符合する。家庭の中の男女関係が夫婦の愛情に基づいた相互扶助的なものにならない限り，社会の中の男女関係の平等性は確立されないのである。問題は内側から解決されなければならないのだ。さらにウルストンクラフトは家庭内の男女のあり方について，こう提言する。

> To be a good mother, a woman must have sense, and that independence of mind which few women possess who are taught to depend entirely on their husbands... When chastisement is necessary, though they [the children] have offended the mother, the father must inflict the punishment; he must be the judge in all disputes. (266)

この初期フェミニストは完全な夫婦間の平等関係は望んでいないようである。妻は夫に依存しない分別をもたねばならない。女性が理性的になるべきであるということは"those women who have most improved their reason must have the most modesty" (229)といった具合に，ウルストンクラフトが何度も主張する信条である。また夫も妻の上に立ち，子供の教育を始めとした家庭内の問題事を適切に裁かねばならない。これはわれわれの見たエリザベスとダーシーの関係に酷似している。エリザベスは理性的に分別を働かせることを繰り返し求められる。その理性の獲得が父性的愛の全面的受容に至ったのだ。またダーシーは「家」を管理するため，妻から敬意を払われなくてはならない。身分的な上下関係はダーシー家では残る。しかしその関係は心情的な地平では平行化され，上下関係を互いに許し合う，情緒における平等性が実現している。エリザベスの父娘関係がアナロジカルに昇華された父性主義が，この微妙な上下関係と平等関係の共在を可能にしているのである。ここには国家体制やキリスト教の圧力に起源し，外部的に家族関係を規定する父権制あるいは家父長制[55]では押さえきれない，道徳的な情緒関係が観察される[56]。このように夫婦関係に道徳性を求め，社会矛盾を克服する点で，ウルストンクラフトとオースティンは共通のフェミニスト的心理をもっていたのである。ただし前者は農民で絹織工をしたこともある父親をもつ，中流の下の階層の出身であった。これに対し，後者は保守的な中・上流階級に生まれ育った人間であった。この点で両者ともに中・上流階級の女性たちの生活を題材にする際にも，違う視点をもつことになる。すなわちウルストンクラフトはそれを外側から眺め，常に現実の社会問題と絡めがちな視点をもっていた。オースティンは逆にそれを内側から眺め，中・上流階級の慣習や儀式を日常生活のレベルから諷刺的に批判したのである[57]。そこには文学を技芸としてみなして，あくまでも「家」の内部描写にとどまり，そこに社会問題を反映させるだけにしておく禁欲とも言うべき芸術的スタンスが成立していた。こうしてエリザベスの獲得する新しい「家」は，オースティンの目で見た，「家」の内側から社会問題を解決する一つのモデルを成すものであったのである。

注

(1) テキストはJane Austen, *Selected Letters 1796-1817,* ed. R. W. Chapman (Oxford: Oxford UP, 1985)に拠る。

(2) ダブル・スタンダードについてはKeith Thomas, "The Double Standard," *JHI* 20 (1959): 195-216を参照。

(3) 当時の女性の差別的待遇についてはLee Holcombe, *Wives and Property: Reform of of the Married Women's* Property Law in Nineteenth-Century England (Toronto: Toronto UP, 1983) 18-36を参照。

(4) この件についてはSandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: the Woman Writer and*

the Nineteenth-Century Literary Imagination (New Haven: Yale UP, 1979) 146-83を参照。

(5) この件についてはMary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen* (Chicago: U of Chicago P, 1984) 194-207を参照。

(6) この件についてはMary Evans, *Jane Austen and the State* (London and New York: Tavistock Publications, 1987) 1-17を参照。

(7) この件についてはClaudia L. Johnson, *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel* (Chicago: U of Chicago P, 1988) 73-93を参照。

(8) 拙論では社会的かつ制度的な意味合いでの家族集団を「家」と呼び，物理的な意味での家や具体的人間集団の意味での家庭と区別して論じることとしたい。

(9) 父性主義についてはDavid Roberts, *Paternalism in Early Victorian England* (New Brunswick, N. J.: Rutgers UP, 1979) 85-101を参照。

(10) テキストはJane Austen, *Pride and Prejudice* (Oxford: Oxford UP, 1980)に拠る。

(11) この件についてはHenrietta Ten Harmsel, *Jane Austen: A Study in Fictional Conventions* (The Hague, the Netherlands: Mouton, 1964) 61を参照。

(12) この点を含むオースティンと思想史との関連はMarilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* (1975; Oxford: Clarendon, 1987) 7-28を参照。

(13) この点についてはRoger Gard, *Jane Austen's Novels: The Art of Clarity* (New Haven: Yale UP, 1992) 119を参照。

(14) この点についてはDarrel Mansell, *The Novels of Jane Austen: An Interpretation* (London: Macmillan, 1973) 82を参照。

(15) 語りの視点の問題に関してはE. M. Halliday, "Narrative Perspective in *Pride and Prejudice*," *Nineteenth-Century Fiction* 15 (1960): 65-71を参照。

(16) 女性にとっての経済行為としての結婚についてはEvans 43-63を参照。

(17) Showalterはヴィクトリア朝初期には統計的に女性の方に男性よりも多く狂人がいたことを実証し，規範を逸脱する女性には狂気のレッテルが貼られる可能性があったことを主張する。彼女に従えば，狂気と女性の虐待は緊密に結びつき，この時代に"the suicidal Ophelia, the sentimental Crazy Jane, and the violent Lucia" (10)の三つのロマン的「狂女」のトポスが生まれたと言う。こうした女性の「閉じ込め」の社会的動きについてはElaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980* (London: Virago, 1987) 1-98を参照。

(18) この点についてはH. R. Dhatwalia, *Familial Relationships in Jane Austen's Novels* (New Delhi, India: National Book Organisation, 1988) 99を参照。

(19) オースティンの小説において，母親たちがいかに娘たちの教育を怠っているかはDhatwalia 97を参照。

(20) この件についてはNina Auerbach, *Woman and the Demon: The Life of a Victorian Myth* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1982) 63-108を参照。

(21) ダーシーとエリザベスの水面下での人格的成長についてはMansell 96-97を参照。

(22) ヴィクトリア朝の感性の流れに関してはPhilip P. Wiener, ed., *Dictionary of the History of Ideas,* 5vols. (New York: Scribner's, 1968-74) 4.217-224を参照。

(23) エリザベスが一貫して服従をしない女性であることは，女性が男性に傅くことなしに，男女が融和的な関係を樹立できるテーマを『高慢と偏見』が追っているからではないだろうか。この点はJohn Hardy, *Jane Austen's Heroines: Intimacy in Human Relationships* (London: RKP, 1984) 47を参照。

(24) エリザベスと父親の信頼関係についてはDhatwalia 113やMarvin 115に指摘されている。

(25) Auerbachはロマン派の詩における閉所愛好症はオースティンの空間処理に一般に見られ，ヒロインのカントリー・ハウスへの嫁入りあるいは接収といった結末に至るような語りの構造を拘束するパターンになっていると言う。しかし彼女はオースティンの部屋が人間の心理を融和的に接続する，あるいは登場人物の内面を拡大する，開かれた要素をもつことには言及していない。おそらく彼女が部屋のプロット的機能面にのみ注目しているのに対して，私がヒロインの成長といった心理的機能面から考えているからであろう。この件についてはNina Auerbach, *Romantic Imprisonment: Women and Other Glorified Outcasts* (New York: Columbia UP, 1986) 3-21を参照。

(26) オースティンの部屋の機能についてはMeenakshi Mukherjee, *Jane Austen,* Women Writers (London: Macmillan, 1991) 70-88を参照。

(27) Kestnerはオースティンの小説が大きな環境から小さな環境へとその舞台を変えることを指摘するが，ヒロインの内的成長という精神的拡大の相には言い及んでいない。この件についてはJoseph Kestner, "The Tradition of the English Romantic Novel, 1800-1832," *The Wordsworth Circle* 7 (1976): 297-311を参照。

(28) この点の分析についてはReuben A. Brower, "Light and Bright and Sparkling: Irony and Fiction in *Pride and Prejudice," Jane Austen: A Collection of Critical Essays,* ed. Ian Watt, Twentieth Century Views (1951; Englewood Cliffs, N. J.: Prentice, 1963) 62-75を参照。

(29) この点についてはMichael Williams, *Jane Austen: Six Novels and Their Methods* (London: Macmillan, 1986) 66を参照。

(30) オースティン自身も父親を慈しむ女性であった。彼女が一度受け容れた結婚の申し込みを断わったのは，父親のもとを離れ，別の男のもとに嫁ぐことに不安感をいだいていたからであるという。この点についてはDhatwalia 126を参照。

(31) Weinsheimerは『高慢と偏見』では各々の登場人物が盲目の世界に住んでいて，そこからの解放がはかられると言う。なるほどダーシーとエリザベスの場合は，彼らが互いに心理的に盲目の部分を確認し合い，愛を達成することは明瞭であると思う。この件についてはJoel Weinsheimer, "Chance and the Hierarchy of Marriage in *Pride and Prejudice," Jane Austen,* ed. Harold Bloom, Modern Critical Views (New York: Chelsea House, 1986) 13-25を参照。

(32) Chandlerはここでのダーシーの代名詞の使い方や，これに対するエリザベスの言葉に詰まりがちな返答に注目する。今までの堅苦しい文体から離れて，両者の間に親密な空気が流れ出したことが暗示されている。この件についてはAllice Chandler, "'A Pair of Fine Eyes': Jane Austen's Treatment of Sex," *Jane Austen,* ed. Bloom 27-42を参照。なお，ダーシーとエリザベスの言葉使いと彼らの関係の発展や人格の変化との関連についてはWalton A. Litz, *Jane Austen: A Study of Her Artistic Development* (London: Chatto & Windus, 1965) 84-111及びLaura G. Mooneyham, *Romance, Language and Education in Jane Austen's Novels* (London: Macmillan, 1988) 45-68を参照。

(33) Mansellはウィカムがエリザベスにとってのノーサンガー僧院になり得たであろうと言う。この点についてはMansell 87を参照。

(34) オースティンの小説のヒロインの教育における，観察眼の養成の重要性についてD. D. Devlinは*Jane Austen and Education* (London: Macmillan, 1975)の中で"To see clearly, or to gaze on what is real, may be for Jane Austen (and many others) the aim of education" (6)と言う。

(35) この件についてはTony Tanner, *Jane Austen* (London: Macmillan Education, 1986) 103-41を参照。

(36) この件についてはDevlin 48-75を参照。なお，DevlinはLockeの教育論の*Some Thoughts Concerning Education* (1693)や*Essay Concerning Human Understanding* (1690)を挙げ，オースティンもLockeと同じく人間の心は白紙状態から教育によって徳目を伸長されなければならないと考えたと言う。オースティンと18世紀的な経験主義認識論の関係は，本論が父性主義によるヒロインの教育を扱うため，これ以上論じ込まないこととする。

(37) この件についてはPaula Marantz Cohen, *The Daughter's Dilemma: Family Process and the Nineteenth-Century Domestic Novel* (Ann Arbor: U of Michigan P, 1991) 86-87を参照。

(38) しかしながら，オースティンは若い頃ピクチャレスク・カルトの信奉者であったらしい。この件についてはHenrietta 64及びJohn Dixon Hunt, "The Picturesque," *The Jane Austen Companion,* ed. J. David Grey et al. (New York: Macmillan, 1986) 326-29を参照。

(39) しかしながら，『高慢と偏見』では偶然と当然の区別がつかないという批評もある。確かにエリザベスの湖水旅行の禁止はガーディナー氏の商用，ダーシーの早期のペンバリーへの帰還は彼の執事への連絡，ウィカムの人格の暴露の阻止は彼の連隊がエリザベスのロンボーン帰還よりも1～2週間前にメリトンを離れたことにより，それぞれ実現している。Weinsheimerはこのように偶然と選択は混然としており，登場人物が知識を得るにしたがって選択の方が重要性を増すと言う。その行動の結果は神の摂理を表わすようになるらしい。この件についてはWeinsheimer 13-15を参照。

(40) この件については野島秀勝，「オースティンの庭」，加納秀夫教授退任記念論文集編集委員会編『ロマン派文学と

その後』所収（東京：研究社，1980）157-72を参照。

(41) ピクチャレスクの鑑賞方法や器具に関してはMalcolm Andrews, *The Search for the Picturesque: Landscape Aesthetics and Tourism in Britain, 1760-1800* (Stanford: Stanford UP, 1989) 67-81を参照。ピクチャレスク一般については，たとえば以下のものを参照。Elizabeth Wheeler Manwaring, *Italian Landscape in Eighteenth Century England: A Study of the Influence of Claude Lorrain and Salvator Rosa on English Taste* (New York: Oxford UP, 1925); Edward Malins, *English Landscaping and Literature 1660-1840* (London: Oxford UP, 1966); Christopher Hussey, *The Picturesque: Studies in a Point of View* (London: Frank Cass, 1967); J. R. Watson, *Picturesque Landscape and English Romantic Poetry* (London: Hutchinson Educational, 1970).

(42) たとえばWilliam Gilpinの*Observations on the River Wye* (1782; Richmond: Richmond Publishing, 1973); *Observations on the Highlands of Scotland* (1789; Richmond: Richmond Publishing, 1973); *Observations on the Western Parts of England* (1798; Richmond: Richmond Publishing, 1973); *Observations on the Mountains and Lakes of Cumberland and Westmorland* (1886; Richmond: Richmond Publishing, 1973)を参照。

(43) テキストはWilliam Gilpin, *Three Essays: on Picturesque Beauty; on Picturesque Travel; and on Sketching Landscape* (London, 1792)に拠る。

(44) Gilpinのピクチャレスクの美学的理論の分析については，特にAnn Bermingham, *Landscape and Ideology: The English Rustic Tradition, 1740-1860* (Berkeley: U of California P, 1986) 63-73を参照。

(45) ペンバリー荘園はオースティンの兄のHenryによって語られたChatsworthがモデルになっているという。この点についてはGrey, "Topography," *The Jane Austen Companion* 380-87を参照。

(46) オースティンの小説中の重要な男性が家庭性(domesticity)に重点を置いていることについては，Evans 59を参照。『高慢と偏見』でも重要な働きをするのは「家」の維持に重要性を見出している男性であることに注目すべきであろう。

(47) オースティンにおける自然は人間関係や社会秩序などのモデルになっている。この件についてはRichard Handler and Daniel Segal, *Jane Austen and the Fiction of Culture: An Essay on the Narration of Social Relations* (Tucson: U of Arizona P, 1990) 18-28を参照。

(48) もっともリディアの駈落ちはダーシー家とベネット家の両方の恥を表わしているとも考えられる。ダーシー家には先代の執事の息子を放蕩者にして，世間に迷惑をかけている点で負うべき恥があるのである。これによってダーシーとエリザベスは共通の社会に対する恥の意識を抱き，彼らの心理的基盤が外部的客観的事実の相でも結実しているとも考えられる。この点についてはMansell 101を参照。

(49) Duckworthはダーシーの変貌は"persona"から"person"へという方向性をもつと言う。ペンバリー荘園以外では，彼は他者に対して心理的なバリアーを張って本質を見せず，人間として未熟であった。説得力のある議論である。この件についてはAlistair M. Duckworth, *The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels* (Baltimore: Johns Hopkins P, 1971) 113-43を参照。

(50) オースティンの小説において，恋人たちは社会的な己の布置を確認することによって成長を遂げる。この恋愛の社会的な側面についてはDaniel Cottom, *The Civilized Imagination: A Study of Ann Radcliffe, Jane Austen, and Sir Walter Scott* (Cambridge: Cambridge UP, 1985) 69-123を参照。

(51) オースティンのシンデレラ物語はヒロインの家族からの決別ではなく，家族への帰属を目指している。彼女のシンデレラ物語の受容に関してはGlenda A. Hudson, *Sibling Love and Incest in Jane Austen's Fiction* (London: Macmillan, 1992) 97-118を参照。

(52) こうした教養小説的側面や個人の成長のテーマについてはHudson 61-96を参照。

(53) オースティンが小さな構造の家庭生活を描きながらも，そこに大きな社会構造の問題を込めていることはDavid Monaghan, "Introduction: Jane Austen as a Social Novelist," *Jane Austen in a Social Context, ed. Monaghan* (London: Macmillan, 1981) 1-8を参照。

(54) テキストはMary Wollstonecraft, *Vindication of the Rights of Woman* (Harmondsworth: Penguin, 1985)に拠る。

(55) この件についてはLawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (Harmondsworth: Penguin, 1982) 109-13を参照。

(56) 後のヴィクトリア朝における道徳的感傷性の展開は父性に基づく人間関係を包摂するものである，と私は考える。

ヴィクトリア朝文学の道徳的感傷性についてはFred Kaplan, *Sacred Tears: Sentimentality in Victorian Literature* (Princeton: Princeton UP, 1987) 11-70を参照。

(57) この両者の視点の問題やオースティンの家族観に関してはWallen Roberts, *Jane Austen and the French Revolution* (New York: St. Martin's, 1979) 155-202を参照。

(1992年8月31日受理)